東方三界黄龍伝

新宿カプリッチョ

文・絵　小龍

東方三界黄龍伝

『新宿カプリッチョ』

文・絵　小龍

登場人物

李沙龍（リーシャロン）　『東新宿探偵社』の所員。日本名は甲斐馨。十九歳。
木佐小次郎　沙龍の同年の親友。『東新宿探偵社』の所長。
鈴木千春　『東新宿探偵社』の所員。マジックのスキルを持つ。
松木ゴロー　霊感の強い占い師。沙龍と木佐の友人。
宇佐美稔　通称ウサミミ。沙龍の同業者。個人で探偵業をしている。
椎名　沙龍の恋人。版下作りの職人。
董天　『蒼龍会』の幹部。沙龍のお目付け役。
張（チャン）　『蒼龍会』の現在のトップ。
ジン　沙龍が歌舞伎町で出会った謎の女性。
リョウ　沙龍の知り合いのホスト。本名は前田了。
加納　リョウの同僚。店のナンバーワン。
周　横浜の中華街に住む老人。在日三世。
上田　歌舞伎町の闇医者。外科医。

ユウユウ　中国人の内科医。オカマ。

めぐみ　ユウユウのところに居る看護婦。

李　W大の留学生。香港人。

陳阮蔡　台湾マフィア『天幇（ティエンパン）』の老大（ボス）。

林（リン）　台湾マフィア『天幇』の日本支部長。

徐栄福（シュロンフー）　福建マフィア『竜門会』から造反したグループのボス。

浜田美枝　林の愛人。

目次

1　人に憑く精霊　6
2　新宿のホストたち　22
3　中華街の周爺さん　37
4　気まぐれ　49
5　歌舞伎町のドクターたち　62
6　依頼　73
7　眷族　95
8　魔性の女　108
9　留学生　123
10　ハーフたちの事情　135
11　会見　152
12　縁　169
あとがき　179

1　人に憑く精霊

新宿、歌舞伎町――。

そこは魑魅魍魎の棲む街である。人の目には映らぬ異形の者どもが、そこに集う人々の欲望を食らいながらひっそりと暮らしている。

例えば由緒正しき陰陽師なら、それら小物の妖怪たちを可視化し、調伏することはたやすい。が、誰の命も、報酬もないのに、そんな慈善事業に汗を流す物好きがどこに居るだろう。主（あるじ）も、イデオロギーも持たぬ妖怪はただその本能の赴くままに、糧を求めるのみ。そして、様々な悪徳の渦巻く不夜城には、彼らにとってのご馳走がそこかしこに撒き散らされていた。まるで、どこかの年金暮らしの老人が小鳥のために用意したパンくずのように。

ただ、もっとつまらない現実的な話をするなら、歌舞伎町は日本一の歓楽街であり、センスのない赤い電飾の門をくぐれば、合法違法を問わず、様々な快楽を提供する店がひしめき合っているところだった。一日に出入りする人の量は田舎

の都市のまるごとの人口をはるかに超える。当然、それだけの人が居て、アルコールが入れば（実際はアルコールだけではないのだが）いざこざも多い。平和なはずの日本で犯罪多発地帯になってしまうのも無理はない。

この悪名高き街に、李沙龍（リーシャロン）がやって来たとき、既にそこは沙龍の同郷の民に侵食されていた。初めてこの街を歩いたときに聞こえてきたのは、日本語よりも中国語のほうが多かったくらいである。ちらほら聞こえる福建語や台湾語の比率などから、その勢力図を察することもできた。広東語もよく聞く。北京語はあまり聞かなかったが、闇に潜んでいるのは間違いなかった。

さらに奇妙なことに、耳をすませば聞いたことのない外国語も聞こえてくる。それらはスペイン語であり、アラビア語であり、ロシア語であるが、馴染みのない者には違いなど分かるはずもなかった。

当時、高校生だった沙龍には、歌舞伎町の外国人事情など正直言ってどうでもよかった。ここは「行き着けの美味しい料理店がいくつかあるところ」でしかなかったし、普段は自分がかつて上海の『蒼龍会』の頭目だったことなど完全に忘れたかのような生活をしていたので、たとえば歌舞伎町の通りで人相の悪い男と

ぶつかったとしても、女子高生らしく「あ、ごめんなさーい」で済ませることも覚えた。

その様子を、沙龍の教育係でもある董天などが見たら、目頭をわざとらしく押さえたかもしれない。

「あの傍若無人で唯我独尊で目上を目上とも思わぬクソ生意気な沙龍様が、あんなしおらしい技を！」

などという大げさなセリフもつけて。

それはともかくとして、沙龍の来日から半年ほど経った頃、歌舞伎町の端っこにあるアラブ料理の店で気になる雰囲気をまとった女性と出会ったことから話そう。

彼女の名前は『ジン』。あだ名だと本人は言っていたが、あとで本名の一部だということが分かる。

一見、普通の日本人で、年齢は二十代後半くらい。三十には届いていないはずだ。沙龍は若作りな美女はたくさん見てきたので、女性の年齢はそう外さない自信はある。むしろ、年齢は男のほうが分かりにくい。董天などもずっと年齢不詳

のままだ。
ジンのことが気になったのは、彼女が何者なのか、すぐには分からなかったからだ。沙龍も地下組織の長で居たくらいだから、観察眼や洞察力はある方だと自負している。その自分のスキルを以ってしても、すぐには結論が出せなかった。
そろそろ猛暑のピークも過ぎた初秋のことである。
その日は、特に用もなく歌舞伎町をブラブラしていただけだったように思う。家主兼同居人の木佐小次郎は、大学受験のための模試に出かけているので、沙龍はひとり閑を持て余していた。
初めての日本の猛暑に打ちのめされていたので、やっと外を歩ける気温になったことが嬉しかった。居候宅から歩いて数分の歌舞伎町は、沙龍にとっては「ご飯を食べるところ」であり、散歩コースであり、色んな場所への近道に使うエリアである。
この歌舞伎町という五百メートル四方の空間では、二十四時間三百六十五日、朝から晩まで発砲音が聞こえたり、血みどろの死体が転がっていたりするわけではない。夜の喧嘩はしょっちゅうだが、それも、殺人事件にまで発展するのはせ

いぜい一年に数回程度の話だ。沙龍はそういった歌舞伎町の現状を知っているし、万が一、なにかしらの事件に遭遇したとしても切り抜けられる自信があったので、この便利な繁華街を敢えて忌避するようなことはなかった。

区役所通りから一本狭い道を入ったところにこじんまりとしたレストランがあった。エスニックな香辛料のいい匂いにつられてひとりでふらっと入ってみる。店内はタイルや調度品などをふんだんに使って、やや過多なアラビアンをかもしだしていた。そういえば、アラブ料理は食べたことはなかった。ちょうどいい。新しい冒険をしてみよう。

テーブルに着くと、アラブ人のボーイがお冷とおしぼりを持ってきてくれた。沙龍と同じくらいの年齢か、もっと若いかもしれない。褐色の肌をした、おとなしそうな少年だ。

「おすすめ、なにかある？」

ボーイに聞いても、困った顔をされる。どうやら日本語はまったく分からないらしい。メニューを指して、身振り手振りでなにやら言っているが、チンプンカンプンである。困ったな、と思ったが、あれこれ考える間もなく、すぐに助け舟

が出された。隣のテーブルからだ。
「わたしが食べている定食、美味しいわよ。サラダとスープ付きで九八〇円」
ひとりで優雅に食事をしていた若い女性が気さくに教えてくれた。まるで、数年前からの知り合いのような口調で。
「じゃ、彼女と同じものを」
そう言って隣を指さすと、ボーイが笑顔で頷いた。
「これ、カプサっていうの。要するに、ピラフね。お米の上に乗ってるのは鶏肉。向こうでは定番の料理みたい」
女性がやはり長年の知り合いのように話を続ける。親しげ、というよりは気心知れた上での素っ気なさに近い。が、もちろん、二人は初対面である。
「へぇ……」
沙龍は別の意味で感心している。
いったい、彼女は何者だろう、と。その答えが一分経ってもまだ出ないのだ。
普段は、十秒もあれば大体の見当はつく。着ている服、物腰、発音、人相から。堅気か否か。見た目通り本当に男なのか女なのか。職人かヒモか。騙す方

か、騙される方か。政府の狗か、どこかの構成員か――。東京は、上海ほど殺伐とした背景を考慮しなくていいはずだが、外国人（それも多くは不法入国者である）の多い歌舞伎町ではそれも大して意味はない。

平日の、昼には遅く、夜には早いという時間に、ひとりでアラブ料理の定食を馴れた様子で食べている二十代後半の日本人女性。

外回りの営業職にしてはメイクも服も派手だし、本人も決してそう思われたくはないだろう。かといって、外見通り、いまから出勤のホステスかというと、沙龍には甚だ疑問だった。彼女には、そういう女性に特有の「匂い」がまったくしないのだ。沙龍は上海で夜の側に立つ女性をたくさん見てきた。彼女たちは、往々にしてたくましいが、弱い。男を食い物にする一方で、また、自身も食い物にされる運命を諦めと共に受け入れているのが夜の蝶たちだ。つまり、そういった女性は、昼間にひとりで堂々と異国の料理を食べたりはしないのである。彼女たちは慣れ親しんだ故郷の味を、よく知っている店でひっそりと嚥下するはずだった。

（この人はもっと『強い』はずだ）

沙龍はそう思った。肉体的にも精神的にも。
その後は特に会話もなく、女性は定食を食べ終わるとさっさと席を立った。沙龍は慌てて女性の後姿に、
「あの、さっきはありがとう。助かりました」
少し声を張り上げてそう言うと、女性は振り向き、初めて口角をあげてみせた。悪戯っ子のような笑顔だ。
「職場が近くてね。歌舞伎町のお店を色々食べ歩いて発掘しているの。また会ったらよろしく。わたしはジン。あだ名だけどね」
「ジン……？」
それは男性の名前ではなかっただろうか、と思ったが、中国と同じく、日本にも男女共有の名前がいくつかあるそうだから、と、沙龍は大して気にしなかった。
カウンター席に座っていたアラブ人の男性が、二人の女性の会話に反応して、
「ジンはアラビア語で『精霊』という意味デスネー」
カタコトの日本語でそう教えてくれた。

「精霊？」
「そんなたいそうなものじゃないわ。ただの静かなジンよ」
彼女はフフッと意味ありげに笑って、行ってしまった。
沙龍はまだこのとき「静（ジン）」が日本語では「しずか」と読むことを知らなかったので、その笑いの意味に気付かなかった。
ジンが去ってから、アラブ人が思い出したように言う。
「『精霊』といっても、ニホンのひとが考えるような、いい意味じゃナイ。ジンは、人に憑くのヨ。すごく悪いヤツではないんだけど、ちょっと悪いヤツ。キレイな女の人に化けたりもするヨ。いまの人も……、美人だったね？　もしかしたら……」
アラブ人がわざとらしく声をひそめて言うので、苦笑してみせた。
「どうだろうね」
沙龍は運ばれてきたカプサを食べながら、彼女はいったい何者だろう、とまだ考えていた。

その後も、ジンとは何度か歌舞伎町の近辺で出くわした。
ドラッグストアで栄養ドリンクを買っているところを目撃したときは、沙龍から声をかけた。
「徹夜明け？」
ジンは特に驚く様子もなく沙龍を一瞥し、会釈をした。目の下に隈ができている。「徹夜明け」は本当かもしれない。
「若いと思ったら、高校生だったのね」沙龍の制服姿のことを言っているようだ。「妹妹（メイメイ）（※中国語で「妹」の意味だが、年下の女の子への呼びかけとしても使われる）、お名前は？」
「……甲斐馨」
いつの間にか、そう答えるようになっていた。
この日本名は、顔を知らぬ父の姓と、その父がつけたという名で、沙龍はそれを中国人の養父から聞いた。中国生まれで中国育ち、さらに中国での通り名があっても、日本に居る以上は日本人としての姓名を名乗るほうが自然だと沙龍は

思っている。事実、自分の両親は日本人なのだ。
「そう、カオルちゃん。お姉さんはまだお仕事中よ。じゃあね」
そんな短い会話だけをして別れた。
このとき、なぜジンが妹妹という中国語をはさんだのか、その違和感を追求すべきだったかもしれない。
次に会ったのは、やはり界隈の食堂だったと記憶している。沙龍が行く場所は限られているので、いつも行く中華料理店だったかもしれない。担担麺が美味いと評判の、四川料理の店である。
そこではもう少し長く言葉を交わした。出身はどこか、仕事はなにをしているのか、独身なのか。無邪気に――少なくとも周囲にはそう見えた――聞く沙龍に、ジンはフェイクを混ぜて答える。東京で生まれ育ったので、田舎は知らない（これは本当らしい）、職業はフリーライターで、食レポから風俗ルポまで、色々やっている（これは怪しい）。結婚はしていないが、彼氏は日替わりで居たり居なかったりする、と冗談のように教えてくれた。
「じゃあ、最初に会ったときにキャバ嬢みたいな格好してたのは、潜入レポかな

んかしてたのか」
「……」
沙龍の鎌掛けに、ジンは分からないように顔をしかめた。
確かに、あのときは少し危ない橋を渡っていた。台湾からのとある密入国者を探していたのだが、その都合上、大阪から来たホステスのフリをしていたのだ。沙龍に会ったときに着ていた派手な黄色いワンピースはその日の夜には捨てた。勿体ないが仕方がない。必要経費ということで給料は人並み以上に貰っている。
今日は抑えた格好をしているが、それでも地味とはいえないだろう。ブランドものの明るい色のツーピースに、美容院でセットした髪。この街では男はともかく、暗い色のスーツを着たお堅い感じの女性は却って目立ってしまうのだ。羽振りのよい装いをしていなければならない。
「まぁ、そんなところ」
仕事の話は適当に誤魔化しておいた。
この脳天気そうに見える少女を警戒すべきなのかどうか、ジンにはまだ分からない。

蒼龍会の元頭目が東京に居ることは知らされていたがまさかあんな簡単に出会ってしまうとは思っていなかったのだ。ある意味、李沙龍の、いや、蒼龍会の命運は自分が握っているのではないか、と思うと背徳的な笑みも漏れる。

現在、張（チャンダーレン）大人が上海の本部ビルに居座ることができているのは、張の後ろに居る、李沙龍という『伝説』が怖くて誰も手出しができないからだ。その『伝説』が、いま、自分の隣で無防備に担担麺をすすっている。

蒼血の沙龍――。

その名を聞いたのはいつだったか、ジンは正確には覚えていない。が、張大人が先代の黒猫を葬ってからしばらくしてのことだから、六、七年前だろう。

あのクーデターは、闇社会ではよくある政権交代だったが、長い目で見れば、上海の、いや、中国大陸の闇社会を一変させた事件だった。

それまでは都市ごとに派閥があり、それらは独立していたのだが、上海の蒼龍会が旧体制を一新し、伝説の力を得たことで、香港の三合会も、福建の竜門会も、蒼龍会に太刀打ちできなくなり、傘下に入らざるを得なくなったのだ。もともと、張は香港出身で、若い頃からそのための下地を作っていたからできたこと

だろう。野心があったのだ。
張はクーデター後、しばらく裏方に徹し、『伝説』を担ぎ上げることにした。それが李沙龍だ。神獣『黄龍』をその身に宿す者――。
大陸の覇者たる蒼龍会の新しい頭目は、人間の血が通わぬ氷のような美女か、はたまた、それに化けた鬼婆か。そんな噂も外から聞こえてきた。
しかし、実物に会ってしまえば、なんてことはない、小柄な少女なのだ。よくある話で、噂はいつも誇張して広まる。案外、『蒼血』などというのは張の周囲が喧伝したことかもしれなかった。
ただ、ジンは神獣の恐ろしさを知っている。正確には上司が言うことを信じているだけなのだが、高層ビルのひとつを簡単に崩壊させることができるという、その桁違いの力は、中国大陸の龍脈が生んだ、人智を超えた力なのだろう。
李沙龍は確かに大陸が生んだ魔物である。しかし、甲斐馨はただの島国の高校生だった。見下ろすほどに小さい背丈も、特に美人とも可愛いともいえない容姿も、恐れるほどのものではない。
「カオルちゃん、学校は楽しい？」

手持ち無沙汰でそんなことを聞いた。
「楽しいよ。ジンは楽しくなかったの？」
「全然。わたし、集団生活、向かないのよ」
「ふぅーん」
沙龍は、というと、やはりこの女性は人に憑く精霊めいた存在なのではないか、と思い始めていた。アラブ人の話を信じたわけではない。これだけハッキリと物を言い、服や髪型で強い自己主張をしているのに、ジンには主体性が感じられないのだ。恐らく、仕事も、上から言われて仕方なくやっているタイプだろう。
（もしジンがどこかの狗なら……）
それを考えると果てしなく憂鬱だ。自分がケリをつけなければならないのか。もう蒼龍会とは縁を切ったつもりなのに。周囲はそう信じてはくれない。
沙龍の憂鬱を知ってか知らずしてか、それからしばらく、二人が街角で出くわすことはなくなった。
二人が再会するのは、沙龍が高校を卒業し、興信所の所員になって二度目の春

のことだった。

2　新宿のホストたち

沙龍が歌舞伎町で知り合った人間は他にもたくさん居るが、ホストのリョウは、その中でも初期のメンバーだった。まだ日本語に不自由していた頃、彼には色んなスラングを教えてもらった。

最初は、からかい半分に声を掛けてきたのだろう。しかし、沙龍が真面目に辞書を引きながら勉強している姿に思うところがあったのか、彼も最終的には面倒見のよい教師になっていた。

「いやいや、『ボーイフレンド』ってのは大正時代くらいの言い方だぜ？　いまは『カレシ』でいいんだよ」

「カレシ？」

「あー、アクセントが違う。カ・レシ、な」

そんなやり取りをしていたら、中華料理店のおかみさんが割って入ってくる。

「リョウちゃん、訛ってない？　カ・レシ、でしょ？　若い子はみんなそう言って

るよ」
「えっ、そうなの？　俺、まだ訛り抜けてない？　上京してもう十年経つのになー」
そんな話をよくした。
金髪に染めた髪は人気アイドルの真似をしている、と言っていたが、彫の深い顔にはよく似合っていた。ハーフかクオーターに見えなくもないが、本人は純日本人だと言っている。この手の濃い顔は南国には多いらしい。実際、彼も九州出身だ。
「俺ね、八人兄弟の末っ子なの。だから、リョウは、終了の了。もうこれで打ち止め、っていう意味。ねぇ。八人よ？　八人。多すぎでしょ？　江戸時代かっつーの。そんだけ多いとね、一人くらい居なくなっても誰も気付かないわけよ。で、俺もどうせしばらくは気付かれないだろうと思ってさ、中学卒業してすぐ家出して上京してきたんだよね。まぁ、ほら、東京って、単純に憧れだったから」
そう語っていたが、実は親にはすぐバレて、一度、強制送還を食らったらしい。親戚を頼って上京したのだから、それも当然だ。

しかし、都会の水を覚えてしまったリョウは、もう田舎暮らしをする気はなかった。またすぐにこの街に戻ってきて、今度は新聞配達の住み込みから始めた。そこから歌舞伎町に流れ着き、ホストになったのは十八のとき。以来、七年間、どっぷりと水商売に浸かっている。

ただ、あまり向上心や野心はないようで、店の売り上げにはほとんど貢献していないと自分で言っていた。適当に働いて、適当に遊んで、適当に生きていければいいや、という考えのようだ。

沙龍がリョウと顔を会わせるのはこの中華料理店がほとんどで、外で会うことはない。リョウの勤めるホストクラブにも行ったことはないし、リョウも沙龍を客として誘うようなことはしなかった。

外で会うことはないといっても、互いに見かけることはよくある。いつだったか、沙龍が酔っぱらいに絡まれているのを、リョウとその同僚が助けてくれたことがあった。大事（おおごと）にはなっていない。それほど性質（たち）の悪い酔っ払いではなかったし、沙龍も様子を見ていたのだろう。

リョウは、怪我はないか、家まで送ろうか、と色々心配してくれたが、同僚の

ほうはあからさまに不機嫌な顔をしていた。細い目が吊り上がっている。若い女性がひとりで繁華街をうろつくからだ、と言いたげだ。自業自得。尤もだ。彼の言いたいことはよく分かる。だから、沙龍も黙っていた。

結局、その日は送ってもらうのは辞退して、ひとりで帰った。不機嫌な顔をしていた同僚のことはすぐに忘れた。

しかし、そんなことがあっても、歌舞伎町の通りを避けるつもりはないのだった。なぜといわれれば、やはり、沙龍には自信があるからだ。便利な抜け道があるのに使わない手はない。例えそこが魑魅魍魎の巣食う場所だとしても。その魑魅魍魎を手懐けることのできるモノを沙龍は飼っているのだ。

都庁が丸の内から新宿に移転した一九九一年、日本はバブル経済の終焉を迎えていた。

その翌年、新幹線『のぞみ』が運転開始し、尾崎豊が夭折した一九九二年に、新宿区歌舞伎町にとってはその後の街の様相が一変してしまうような事件があっ

た。即ち、暴力団対策法（通称、暴対法）の施行である。
この暴対法によって、日本の暴力団は目立つ活動ができなくなり、歌舞伎町は外国人勢力にじわじわと侵食されることになった。その勢力とは、中国、韓国、タイ、ベトナム、ロシア、イラン、コロンビア――。
中でも中国マフィアの権勢は凄まじく、一時期は日本の警察もまったく手をつけられない状態だった。
彼らは日本のヤクザと違って、親分への忠誠心などは持ち合わせていない。はした金で殺しもやるし、警察に顔が割れればすぐ高飛びをしてしまう。国際手配をしても偽造パスポートを複数所持する彼らを逮捕するのはほぼ不可能に近かった。
沙龍が来日した一九九八年も、歌舞伎町には外国人がたくさん居た。中でも目立っていたのは、台湾マフィアと福建マフィアで、歌舞伎町内で起こる大抵の事件は、常に彼らが関わっていた。強盗、賭博、売春、銃の密売、麻薬取引、殺人――。一番カネになるのはなんといってもクスリだ。彼らは大麻や覚醒剤を売るために歌舞伎町を根城にしているといっても過言ではない。その取引のために色

んな店が使われる。ただのラーメン屋から、キャバクラまで。店ぐるみの場合もあるし、店主はなにも知らない場合もあった。

リョウの勤めるホストクラブは、日本人が経営しているまっとうな店だが、昔から一帯をシマにしている日本のヤクザにミカジメ料は払っていた。でないと、やっていけないのだ。いわゆる「ケツもち」が居ないと、チャイニーズ・マフィアたちに好き放題荒らされ、いつの間にか店を乗っ取られてしまうのである。実際に、そういう被害にあった店もひとつやふたつではない。まさに無法地帯である。

以前、リョウは店に来ていた中年の女性客に、クスリを売ってくれる人を知らないか、と小声で聞かれたことがある。ただのヤク中か、おとり捜査だったのかは分からないが、「知らない」と答えた。実際、リョウはそういったことには首を突っ込まないようにしている。ストレスの多い仕事なので、同僚の中には覚醒剤の手放せない者も居るし、店の通り一本向こうにたむろしているイラン人のグループは恐らく売人なのではないかと見当はつけているが、危うきには近寄らず。この通り一本向こうは、自分のようになんの力も持たない男が生きていける

世界ではない。
ホストクラブというのは、歌舞伎町の中でも比較的平穏に営業できる数少ない店だった。客は九割以上女性なので、客同士のいざこざがあっても殴る蹴るまでには発展しない。酒乱の客も居ないことはないが、なだめてどうにかなるレベルだ。時折やって来るチャイニーズ・マフィアは怖いが、ミカジメ料を払っている限り、強面連中がなんとかしてくれる。そのミカジメ料は年々上がっているが、店長はこれも時勢だと諦めていた。
しかし、店のナンバーワンを張っている加納という男は、やや潔癖なところがあるらしく、店長のその方針には納得できていない。経営に口を出すようなことはしないが、日々、憤りは感じていた。
加納は、以前、リョウが酔っ払いに絡まれている沙龍を助けたときに一緒に居た男だ。リョウの郷里の後輩でもある。売り上げ第一主義のこの業界では、通常、ナンバーワンのホストには王様のような振る舞いが許されるのにも関わらず、二人の間には先輩後輩の関係が続いていた。別にしぶしぶではない。加納は、リョウに仕事を世話してもらった恩を忘れていないのだ。

店内では源氏名にさん付けで呼んでいるが、店を出れば、中学のときと同じ調子で話しかける。
「リョウ先輩、今日はちゃんぽん食べにいきましょうよ！」
「おー、どうしたよ？　いきなり」
「いや、故郷の味って、なんか急に食べたくなりません？」
「ああ、たまになー。でも、ここらへんの店のはやっぱ違うんだよな。どこかニセモノっうか」
リョウの言うことは加納には分かる。東京のちゃんぽんは、こってりし過ぎなのだ。郷里で食べていたのは、もっとまろやかな味だった。
「しっかし、お前がナンバーワンになるとはなぁ……」
坊主頭の田舎の少年だった頃を知っているリョウは、加納のモデル然としたスマートな風貌を見てたびたびそう言う。元から素材はよかったのだが、都会暮らしでみるみるうちに洗練され、今ではすれ違う女性のほとんどが振り向く。スッキリした目鼻立ちにはモノトーンのスーツがよく似合っていた。髪も染めていない。黒髪が一番自分に似合うと知っているからだ。

そんな加納が、金髪に南方系の濃い顔をしたリョウと二人で居ると、その対照具合が目立った。
「で、のぼりつめた後はどうすんだ？　別の店に移るつもりなら、新宿区内はやめておけよ」
リョウがそう言うのは、加納が店長とあまりうまくいっていないことを知っているからだ。いずれは自分を置いてあの店を出て行くのだろう、と思っている。
「俺は、店長が嫌いなわけじゃないんですよ。ただ……」
「分かってる。ケツもちの件だろ？　だが、あれはしょうがねぇよ。この街で商売する以上、呑まなきゃいけない話だ」
リョウは割り切っている。自分は経営者ではないし、毎月の給料さえ貰えればあとはどうでもいいからだ。
しかし、加納は違う。
せっかく、国が重い腰をあげて暴力団対策に乗り出し、か弱い一般市民はヤクザの脅しに屈しなくてもよくなったのに、なぜいまだにこの街ではミカジメ料などというものを払わなければならないのか。しかも、やつらときたら、たまに店

に顔を出し、奥で高級酒を飲んでいくだけだ。毎回対応する店長もへりくだりすぎて、みっともない。

小さい頃から日陰者として生きてきて、それ故に反骨精神だけでのし上がった加納には、そんな思いがあった。ここは、努力と実力だけで稼げる世界ではないのか。なぜ、理不尽な暴力が当たり前のように許されているのか。

店長に言ったことはないが、マネージャーには何度かそのことで意見をしたことがある。店のナンバーワンの言葉は無視できない弱みもあり、話を聞いているうちに、最近はマネージャーも加納の味方になっていた。

十年前は月に数万円だったミカジメ料が、いまや三桁に届く勢いなのだ。そんなにむしり取られては店側もやっていけない。かといって、ヤクザ側にも引くに引けない事情がある。ただでさえ限られているシノギがどんどんチャイニーズ・マフィアたちに削り取られ、彼らも青息吐息なのだ。取れるところから値を吊り上げるしかない。

「俺たちもロシア人から銃でも買って武装しましょうよ。中国人ったって、全員がジャッキー・チェンなわけでもないし。どうせヤク中でしょ。筋モンに守って

もらわなくっても、自分の身は自分で守れます」
そんな加納の冗談を、リョウは笑いながら聞いていたが、それが冗談ではないと気付くのにそう時間はかからなかった。

事件が起こったのは、沙龍が高校を卒業し、興信所の所員となって一年ほど経った頃のことだ。
歌舞伎町の片隅で、加納が数人の男に痛めつけられていた。薄暗い路地で、誰も気付かないし、気付いたとしても見て見ぬ振りをしてそそくさと足早に去っていく。ここはそういう場所だ。
沙龍は仕事からの帰りだった。その道は何度か使っているし、痴話喧嘩や酔っ払い同士の小競り合いにはよく遭遇するので、その日も、わき道で誰かが制裁を受けているな、としか思わなかった。
沙龍もまた見て見ぬ振りで通り過ぎようとした。が、途中で気が変わった。
暴行を加えている男たちが汚い台湾語を叫んでいたからである。それはもう、

聞くに堪えない言葉だ。せっかく仕事明けの晴れやかないい気分だったのに、それをぶち壊してくれた礼はしなければなるまい。

沙龍は、暴行現場にずいと近寄り、主犯格の男の襟首を摘むと、向かいのラブホテルの壁めがけて直線に投げつけた。ぐしゃっという嫌な激突音がした。

呆気に取られたあとの二人は、我に返る前に、沙龍に一発ずつ殴られ、昏倒した。誰になにをされたのかも覚えていないだろう。

うずくまって倒れている男は、かろうじて意識はあるようだ。うわごとのように出た言葉は驚くことに日本語だった。着ているものからしても、日本人であることは間違いないようだ。

（日本人が、台湾人に制裁を受けてたのか……。なぜ……？）

不可解だった。普通、こういった痛めつけることを目的とした私刑は同族間で行われる。外国人同士のこともあるが、それは中国人が雇用しているイラン人に制裁をくわえるとか、コロンビア人が使っている中国人を「指導」したりするときだ。日本人が餌食になるのは、なにか特殊なケースだと思われる。

「あんた……？　リョウ先輩の……」

よろよろと沙龍の手を掴んだその日本人が、知っている名前を口にしたので、面倒だな、と思ったが、助けることにした。といっても、知り合いの闇医者のところに運んだだけである。歌舞伎町の常で、こういう場合、救急車を呼ぶことはない。呼ばれると困る人が多いからだ。

路地から歩いて二分。沙龍がさっき台湾人を投げつけたラブホテルの、ちょうど裏側にあたる場所に、コンクリートの薄汚い三階建ての建物があった。もとは商業施設だったらしい。一階部分には何脚かテーブルと椅子が放置され、飲食店だった頃の名残を見せている。いまは廃墟同然のようなたたずまいで、歌舞伎町に何人か居る闇医者のひとりが病院代わりに使っていた。

「患者の名前は？」

中年の医者は上田という。下の名は知らない。悪役プロレスラーのような風貌で、とても医者には見えないのだが、腕はいいと評判だ。見た目に加え、いつもぶっきらぼうな話し方をするので、若い女性は怖がってまず近付かない。沙龍は上田に変わり者だと思われていた。

「知らない。でも、多分『ミヤビ』っていうホストクラブの人」

「ふん、ホストか。確かにキレイな顔しとるが……。こんなになっても顔は死守するってぇ、見上げたプロ根性だな。で、この兄ちゃん、なにをしてこんな目に？」
上田は、気絶している患者の顔をまじまじと覗き込みながら聞いた。ブランドもののスーツはボロボロなのに、顔は殴られた痕がない。
「それも知らないよ。通りすがっただけだもん」
沙龍は上田に万札を何枚か渡すと、「あとはよろしく」と言って、自分はすぐに帰った。患者が回復するのを待つ義理はない。

翌日、リョウから沙龍に連絡があった。やはり男はリョウの同僚だったらしい。まだ起きられないが、意識は回復したようだ。
二年前のことなので沙龍は忘れていたが、加納のほうは沙龍のことを覚えていた。正確には髪の色と背丈を、である。東洋人にはありえないベージュ色の髪と、中学生と見まごうほどの身長は、加納でなくとも記憶に残りやすい。

「それで、あいつ、馨ちゃんにお礼がしたいって言ってるんだけど」
リョウがもごもごと言っている。沙龍は上田に口止めしておかなかったことを軽く悔やんだ。こういう展開が一番面倒くさい。
「いや、だから、私は通りすがっただけで、大したことしてないから。その加納ちゃんとやらにも、忘れてって言っておいて」
一方的に電話を切った。
厄介ごとに巻き込まれるのはご免だ。それでなくとも、木佐には『トラブルメーカー』と嫌味を込めて呼ばれているのに、余計なトラブルはご遠慮いただきたい。

3　中華街の周爺さん

歌舞伎町は広さだけでいえば横浜の中華街とそう変わらない。五百メートル四方、二十五ヘクタールほどの面積だ。両方とも行ったことのない人間にはピンとこないだろうが、沙龍はどちらも行ったことがある。

端から端まで、健康な人間なら三分もあれば走り抜けることのできる距離、といえばなんとなく分かるだろうか。

初めての中華街は、木佐に連れていってもらった。

木佐と同居を始めてしばらくした頃、ふと、缶詰のライチが食べたくなったことがある。上海でよく食べていたおやつである。しかし、コンビニやスーパーはもちろん、新宿じゅうのデパートを見てまわったが、どこにも売っていない。途方にくれて木佐に訴えてみると、

「横浜にならあるんじゃないか？」

端整な顔があっさりと言う。

「ヨコハマ？　なんで？」
「もしかして知らないのか？　あそこには日本一の中華街がある」
「チャイナタウン!?」
盲点だった。日本に来る前に読んだガイドブックには載っていたはずだが、いざ、新宿に住んでみると、生活で困ることがないので、チャイナタウンというものの存在をすっかり忘れていたのだ。
横浜の中華街は日本一どころか、世界でも最大規模を誇る。ここでライチの缶詰が売っていなければ、日本では手に入らないと諦めるしかなかった。が、当然、そんなことはなく、晴れて沙龍は輸入品の缶詰を手に入れ、以来、「困ったときの中華街」という諺まで勝手に作った。
沙龍はホームシックにかかったことはないが、やはり中国語が飛び交う雰囲気というのは落ち着くようで、その後も何度か木佐と一緒に、またはひとりでも遊びに行くようになった。
横浜の中華街には、歌舞伎町ですれ違う、獣の目をした中国人とは違う、普通の中国人たちがいっぱい居る。ホッとした。

木佐が感心するほど巧みに、北京語と広東語と上海語を使い分ける沙龍は、色んな店の人とすぐ仲良くなり、ここでもいくつかの情報源を作ることに成功した。

その情報源のひとつである周爺々（イェイェ）（周爺さん）は、十九世紀末、まだ横浜中華街がただの外国人街だった頃からそこに住み着いていた一家の三代目である。実は、いま中華街に居るのは半数以上が八十年代以降に大陸からやって来たニューカマーで、彼らは歴史を知らない。沙龍が周爺さんのような古参を探し当てたのは、ほとんど直感で、やはりここは沙龍の嗅覚がすばらしいと誉めるしかない。

周爺さんは横浜生まれ、横浜育ちなので、ネイティブと変わらない日本語を話すが、広東語も話せた。家の中では広東語しか話すことを許されなかったからだ。それが二代目の両親の教育方針で、彼らは一代目からその考えを受け継いだらしい。中国語の話せない在日中国人はどちらの社会にも居場所がなくなってしまうという恐れがそうさせたのだろう。

確かに、中国語が喋れないなら中国人のコミュニティーには入れてもらえないし、「血」を重視する日本人は国籍が日本でも、民族が違うと自分たちの本当の

仲間として受け入れてくれない。
周爺さんは、中国語を話す中国人として、中華街で生きることを選んだ。結果、流暢な日本語も話せるということで、日本人相手の商売は順調にいった。中華街に店を三つ持つまで成功し、それらは子供や孫たちが継いでいる。いまはのんびりと老後を送っているところだ。
その周爺さんいわく、
「小姐（シャオチェ）はちょっと変わった広東語を話すのう」
「あ、やっぱり？　上海訛りが入ってるのかな。自分ではちゃんと喋ってるつもりなんだけど」
「ホウ、出身は上海かね」
いまは長男が経営している雑貨店の奥に沙龍を招き入れ、自ら黒茶（※特殊な製法によって作られる発酵茶。プーアール茶が有名）を淹れてくれた。
「そういえば、中華街でも上海語は聞かなくなったな……」
周爺さんは慣れた手つきで茶壺（チャフー）にお湯をかけている。こうして茶壺ごと温めるのだ。熱湯は茶盤（チャーバン）の下に吸い込まれていく仕組みである。

「最近、耳にするのはなぜか閩語（ビンゴ）（広義の福建語）が多い」
「ふぅん……」
「あまり見ない顔だから、最近になって日本にやって来た連中だろう」
周爺さんは七十年間ずっと中華街で生きている。ここで暮らしている人間のことはほぼ全員知っている。観光客でもない中国人の新顔がうろついていればすぐ分かるのだ。
「本土からわざわざ日本の中華街を見に来るの？」
沙龍は笑った。それのなにが楽しいのだろう。てんで分からない、といった風に。
「観光で来てるのも居なくはないだろうが」
そう言って、周爺さんはいったん手を止め、宙を見つめた。お茶が抽出されるのを待っているのだ。
「たぶん、アレはまっとうな人間じゃないよ」
「……」
沙龍は特に反応しなかった。その話題に興味はない、という体を繕わなければ

ならない。恋も諜報も焦ってはいけないのだ。
普段、歌舞伎町を根城にしている福建人たちが中華街でなにをしているのかといえば、金になるような仕事を探しているのだろう。不法入国している福建人の中には日本語を喋れない者も多い。そうなると、自然、中国人社会の中をハイエナのようにウロつくしかなくなる。悲しい本能だ。
「福建の人はちょっと怖いよね」
世間話のように言った。
「……ウム」
この時点で、周爺さんも、沙龍がただのホームシックにかかった少女ではないことくらい気付いているはずである。その上でシラッと協力してくれるか、それとも警戒して殻にこもるかは、沙龍のふるまい次第ということになる。
ただ、高級茶葉である黒茶でもてなし、福建人の話題を出した以上、協力する気はあるようだ。商売人はカネの気配に敏感である。沙龍には金持ち特有の匂いがあったのだろう。それも、桁違いのやつが。
「サンザシ、食べるかね？」

お茶と一緒にドライフルーツも出してくれた。
「うん、ありがとう」
「気に入ったら、次は買っていっておくれ。店に置いてあるから」
「うん、そうするよ。高い方がやっぱり美味しい？」
「そうだね。普通のもそれなりに美味しいけどね」
このやり取りで、暗黙のうちに周爺さんは沙龍の情報提供者になることを了承し、沙龍はその見返りを払うことを約束した。
ただし、周爺さんは沙龍の本当の正体は分かっていない。彼女の父親か、あるいは上司が、日本で事業を始めるために、在日中国人社会の情報が欲しいのだろう、とアタリをつけるのがせいぜいだった。

加納というホストを助けた二日後、沙龍は中華街に周爺さんを訪ねた。
沙龍にいわせれば「余計なトラブルを回避するため」であり、木佐にいわせれば「余計なトラブルを背負い込む行為そのもの」なのだが、どちらが正しいかは

結果が出るまで分からない。
「台湾人たちは、福建の連中を本気で潰す気のようだね」
既に電話で沙龍からあらましを聞いていた周爺さんは第一声、そう言った。
商売人にも独自のネットワークがある。周爺さんもまた、沙龍には言いたくない情報源を持っているのだろう。
「戦争の原因は？」
「さあのう……。どうせ女がらみか、身内の誰かを殺された報復とか、そういうありきたりの話だと思うが。それで、途中から汚職警官も登場して、組織のヒットマンであるジェット・リーが……」
「爺々～、私は昨日見た映画のあらすじを教えてくれって言ってるんじゃないんだけど」
周爺さんは、たまにこういう冗談を真面目にはさんでくる。
若者をからかいたいだけなのか、それとも、沙龍の度量を見ているのか。窪んだ眼窩から覗く黒々とした目は、なにも語らない。
「そうは言っても、知らんもんは知らん」

「あ、そう」
「例の日本人は、福建の連中に嵌められたのではないか」
そして、急にまた元の話に戻るのだ。油断ならない。
「嵌められた？　なんで？　接点は？」
「まぁ、落ち着け」
「……」
周爺さんの言う「福建の連中」というのは、竜門会とよばれる犯罪グループのことで、不法入国の斡旋によって巨額の利益を得ている。蒼龍会の傘下に入って強力なバックアップを取り付けたが、それをよしとしない一派が本土を離れ、今、日本で暴れている。つまり、歌舞伎町をうろついている福建人は蒼龍会の構成員ではなく、むしろ蒼龍会とは敵対する者たちなのだ。
「わしの聞いた話によると、最近、歌舞伎町の福建人たちは資金繰りに困っているらしい。それまで偽造パスポートを作っていた本土やタイの職人たちに契約を打ち切られ、斡旋業がうまく回っていないようだ」
「職人はなぜ打ち切った？」

「彼らは『竜門会』というブランドに品を納めてきたのであって、造反したグループとはもう取引したくない、ということじゃないのか」
「それは周爺さんの推測？」
「いや、情報を伝えてきた者の感想だ」
「なるほど……」
日本の入管を騙せるだけの偽造パスポートが用意できなければ、不法入国ビジネスは成り立たない。盗んできた本物のパスポートの写真部分を張り替えるという荒技もなくはないが、それでは数がさばけない。資金難に陥るはずだ。
そこで、福建人たちは手当たり次第歌舞伎町の店を荒らしまくるという最後の手段に出た。荒らされたくなかったら金をよこせ、という策もなにもないクズの暴挙だ。当然、それをやれば「ケツもち」と呼ばれる日本のヤクザが出てくるが、彼らは日本のヤクザなど怖くはない。銃でさっさと殺してしまえばいいだけだ。歌舞伎町ではなんでも売っている。人民解放軍から流れてきた機関銃まで簡単に手に入る。
さらに、日本の警察は歌舞伎町の中で殺人事件が起きても、あまり真面目に捜

査しない。犯人が中国マフィアなら、彼らは死体が発見される頃には既に中国に逃げ帰っているからだ。これでは逮捕のしようがない。

「やりたい放題だな」

沙龍は人事のように言って笑った。本当はもっと別の感情がある。張大哥はなにをやっているのか。恐らく、日本に居るチャイニーズ・マフィアたちの現状は把握しているはずだが、彼らを異国で好き勝手やらせておくほど張もお人好しではない。台湾マフィアは守備範囲外だが、少なくとも福建人たちにはなんらかの対策が必要だろう。

「結局、食い詰めた福建人が元から仲の悪かった台湾マフィアと狭い場所でかち合ったのが、戦争の原因だろう」

「で、日本人の件は」

「ウム。その男は店の稼ぎ頭だそうだから、荒らし行為をやっていた福建人に目をつけられたのではないか。彼の方にもつけ込まれる隙があったのだろう」

「でも、囲んでいたのは台湾人だよ」

「ウム……、すまん、そこは情報がない」

その日は、他に耳よりな話を二つ三つ仕入れて新宿に戻った。

沙龍は自分から事を起こすつもりはない。トラブルに巻き込まれないために情報を得ているだけだった。

4　気まぐれ

沙龍のいまの身分は興信所の一スタッフである。所長を含めて所員は三人しか居ないが、『東新宿探偵社』は、この業界ではほんのちょっぴり有名だ。決してよい意味で、ではない。あそこの興信所は破壊工作向きだ――、といわれている。

もともと、守銭奴の木佐が始めた事務所である。ペイのいい危険な仕事ばかりを好んで受けていたら、いつしか、そんな噂が流れてしまった。その噂も間違ってはいない。原因は主に、依頼仕事はいつも力技で片付けてしまう沙龍にあるだろう。

たとえばストーカーをなんとかして欲しいという依頼では、沙龍はだいたいそのストーカーを病院送りにする。再犯や逆恨み、はたまた慰謝料請求を防ぐためにも、恐怖はたっぷり味あわせておくのも忘れない。

沙龍が「ちょっとやりすぎちゃった」と言うときは、周囲の建造物が一部損傷

または全倒壊というオプションまでもれなくついてくる。これでは無関係の第三者から損害賠償を請求され、報酬がマイナスになってしまうわけだ。

木佐はそんな沙龍の仕事ぶりを嘆いているが、実は、彼もあまり人のことを言えた義理ではない。所員が少ないせいで所長である木佐も頻繁に現場に出ているのだが、先の例でいえば、木佐なら、示談の場を設けて、ストーカーに誓約書を書かせるだろう。ただし、その目の前で、木佐は手慰みに百円玉を人差し指と親指に挟んで、折り曲げたりしている。要するに基本的な姿勢は沙龍と変わらないのだ。

『東新宿探偵社』で一番まともな思考をしているのは（本人も自覚しているが）鈴木千春である。木佐より二つ年上の地味な青年だ。本来はマジシャンなのだが、色んな事情と縁と、本人の希望もあって、いまは木佐の下で働いている。マジックの技は一流だ。彼の養父が有名なマジシャンで、千春も小さい頃から養父の指導でマジックの修行をしてきたのだ。

その鈴木千春が、事務所に戻ってきた沙龍に告げた。

「馨さん、さっき、男の人が訪ねてきてましたよ」

「誰？」
「それが……、お名前は？　って聞いたんですけど、名乗るほどじゃないとか言って。なんか、芸能人みたいな人でした」
「ああ……、リョウちゃんの同僚かな。それで？」
「また来るって言ってましたけど、とりあえず、これ」
と、「芸能人みたいな人」が置いていった菓子折りを指した。
「はぁ……」
とりあえず、突っ返すわけにもいかないので、菓子折りは千春と二人で食べることにした。木佐は留守のようだ。鬼の居ぬ間のリフレッシュである。
「春ちゃん、いまどんな仕事してんの？」
マドレーヌを頬張りながら沙龍が聞く。あまり、互いの仕事のことは把握していない。
「いま、フリーなんですよ。それで、去年の年末に、ちょっとやっていたショーの仕事をまたやろうかな、と思って。店長もいつでもおいでって言ってくれてるので」

「ああ、例のキャバレーの？　本業のほうね」
「いまは興信所のほうが本業だと思ってますけどね」
はかなげな笑顔を見せる。この地味な青年が、マジックショーの舞台では人が変わったように華やかになるのだ。その変わり身を見るのは楽しい。
（そういえば……）
沙龍はふと、椎名のことを思い出した。去年、千春のショーを見に行ったときに会った男だ。背格好はそうでもないのだが、雰囲気が、鉄太郎に似ている。
鉄太郎というのは沙龍が上海で会って、恋をし、プロポーズまでした雀士である。そのとき、沙龍は弱冠十歳。あまりにも早熟すぎる恋だったせいか、その後、十年経ってもなかなか忘れられない。いまだに、鉄太郎の面影を追い求めている自分に気付く。
椎名とは、実は、以前にも会っている。最初に会ったときも、予感めいたものはあった。が、鉄太郎に似ているというだけでアプローチするのは、さすがに節操がなさすぎる。だから、沙龍は「次」に賭けたのだ。縁があればまた会えるだろう、と。そして、そのとき、自分の状態と彼の状態がピタリと合うなら、なる

ようになるだろう、と――。
年末は仕事が忙しくてそれどころではなかった。では今なら？
「……」
沙龍は、自分の部屋に戻って、いくつかのカバンをひっくり返してみた。去年、自分がよく使っていたのはどれだろう。どれかのカバンの底には、キャバレーのショップカードがあるはずだ。
「……あった」
三十分ほど探して、やっと見つけた。派手な色使いのカードには、椎名が書いた携帯番号がある。しばらくそれを手に取って見つめていた。
（……よし）
覚悟はできた。かけてみよう。あまり使わない自分の携帯電話に、椎名の番号を注意深く打ち込んだ。もしかしたら、でたらめの番号かも、と思い、だったら「間違えました」と言って切ればいい、と却って気が楽になった。
「……もしもし？」
何回かのコールの後、そろそろ諦めようかという頃合で、低音のよく響く声が

した。椎名だ。そのとき、沙龍は気付いた。そうだ、一番似ているのは声なのだ。
「こんにちは、甲斐馨です」
「ああ」
すぐに分かってくれたようだ。第一声は警戒心に満ちていたが、それもすぐに解けた。
「もう諦めてたよ。なんだって今かけてくる気になった？」
椎名は笑っている。年末に連絡先を渡してから、四ヶ月経っているのだ。
「んー、気まぐれかな」
「おいおい、そこはもう少し繕うもんだぜ？」
「さっきね、春ちゃんと去年のマジックショーの話をしてたの。それで、椎名さんのこと思い出した」
「ああ、あの手品師ね。仕事仲間だったか？」
「うん。興信所」
「見えねぇんだよなぁ……」

椎名はまだ笑っている。嬉しそうだ。
「まぁ、最初に会ったとき、私、まだ高校生だったしね」
「なんだ、覚えてたのか。てっきり忘れてんのかと思った」
「覚えてるよ。だって……」
言いかけて、詰まった。そのまま言ってしまうほど馬鹿ではないし、わきまえている。
(だって鉄さんに似てて、かっこよかったから)
「なんだって……？」
「いや、声が」
「声？」
「うん、好みだなーって」
「はぁ……。なんか、喜んでいいのか、残念がったほうがいいのか、よく分からん感想だな、それ」
「ごめん」
「なぁ、いまから時間あるか？　会って話がしたい」

「うん、いいよ」
その日、初めてデートをして、付き合うことになった。
ずっと謎だった椎名の仕事も判明した。特殊な版下を作る職人だという。以前はデザイン会社に勤めていたのだが、社長と喧嘩してそこを辞めてからは、個人でやっているらしい。椎名が自分から話してくれた。
沙龍は仕事のことは聞かないことにしている。経験上、男に仕事の話を振ると面倒臭いだけ、と知っているからだ。また、生い立ちについても、上海で「聞いてはいけないこと」だと学んだ。
沙龍のこういった「なにも聞かない」というスタンスは、案外、人心を掴んではいる。根掘り葉掘り聞かれるとうんざりするのは男も女も変わらない。
ただ、なにも聞かれないのは、自分に興味がないのだと思ってしまう人間も居るが、それは平和な国で、なにも後ろ暗いところなどなく、平穏に生きてきた証拠だ。裏街道を生きてきた人間には、隠したい過去が必ずある。
椎名は、最初から沙龍のことを気に入っていたが、それは女として、ではない。恐らく、沙龍の年齢に似合わない振る舞いのようなものに無意識に惹かれた

のだろう。沙龍が女性であったことは、椎名にとっては思いがけぬデザートみたいなものだった。

加納は宣言通り、翌日もやって来た。律儀な男かと思いきや、年下の女の子に借りを作ってしまったのが自分の中で許せないだけということが、対応した千春にも分かった。

沙龍は面倒臭いので居留守を使ったが、千春は「あの人、きっと、馨さんに会えるまで毎日通ってきますよ」と言った。それもかなり面倒臭い。ため息がでた。やはり、あのとき助けるのではなかった。どうしてくれよう。

千春のなにか言いたげな視線を受け、沙龍は家を出て行った。

「おーい、加納ちゃーん」

いま起きましたという顔と髪をした、つっかけにジャージ姿の中学生のような女の子が追いかけてくる。

加納は顔をしかめた。

服装の乱れは心の乱れ。沙龍のだらしなさは、常に身なりに気を使っている加納にはとても信じがたかった。
以前、酔っ払いに絡まれていたのを助けたときも、世間知らずの馬鹿女だと思ったが、そう思った自分は間違っていない、と思いを新たにする。
「昨日はお菓子ありがとね！　今日もわざわざ来てもらっちゃってごめんね！　昨日は明け方まで仕事だったからさっきまで寝てたんだけどさ、同僚が気を使って起こさなかったらしいんだよね」
思いっきり嘘である。昨日は椎名と会っていただけだし、千春は沙龍の部屋まで起こしにきたのだ。それを「えー、めんどいから居ないことにして」と言ったのは沙龍である。
「……いえ、こちらこそ、中国人から助けてもらったお礼もせずに申し訳ありません」
ものすごい棒読みである。敬語など使いたくない、礼など言いたくない、というのがありありと分かる。
が、沙龍は敢えてそこには気付かない振りをした。

「治療費も出していただいたそうで。先生に聞いても肝心の金額を教えてくれません。いくらぐらいかかりました？　お支払いします」
「いや、たいしてかかってないよ。お菓子のほうが高かったんじゃないかな」
それも嘘である。
闇医者の治療費は、当然、普通の医者よりも高い。上田はそれでも良心的なほうだが、加納の場合、傷口の縫合も何箇所かあったので、それなりの金額になっただろう。
「たいへん失礼ですが、たぶん、俺のほうが稼いでいると思うので、遠慮なく言ってください。後からでもお支払いしますから」
「……」
沙龍は困ったような笑顔を作っただけだった。確かに、純粋な月給で比較すれば加納のほうが何倍も稼いでいるだろう。しかし、口座の所持金で言えば沙龍は加納の百倍は（誇張ではなく）持っているはずである。
「ところで、甲斐さん。あのとき、貴女の他にも誰か居たのでは？」
「え？　居ないよ？」

「……」
加納はいまだに信じていない。こんな背の低い痩せた女の子が、あのゴロツキ三人を撃退したはずはない。誰かもう一人か二人、屈強な男がそばに居たのだろう、と思っているのだ。
しかし、医者はそんな男は居なかったと言っていた。沙龍がひとりで加納を担いで病院に現れたのだ、と。
「そうですか。とにかく、助かりました。ありがとうございました」
礼は言いたくないが、言わねばならない。やはり、律儀は律儀なのだろう。
いや、どこまでも真面目なのかもしれない。
「それはもう忘れていいよ。正直言うと、私も最初は助けるつもりなかったんだ」
「……では、なぜ？」
「うーん、気まぐれかな」
「……。なぜあんな目にあっていたのか、聞かないんですか？」
「話したいなら聞くよ？」

「いえ……。できれば、警察には言わないでください。それをお願いにきたんです」
「そう。分かった。言わないよ」
「ありがとうございます、では」
歩き方がまだ尋常ではない。
リョウの話では肋骨も折れているし、あちこち脱臼もしているらしい。昨日はさすがに仕事を休んだようだが、今日は店に出ると言っている。
あれは意地だけで生きてきた人間かな、と沙龍は加納の後姿を痛々しそうに見ていた。

5　歌舞伎町のドクターたち

夜になって、沙龍は歌舞伎町に出かけた。上田に治療費はあれで足りたのか、聞きに行ったのだ。とはいえ、それはどちらかというと口実で、本当は、上田がなにか聞いているのではないかと思ったからだ。加納のこともそうだが、最近は医者の世話になっている者がたくさん居そうだ。病院は情報の宝庫である。

「加納ちゃん、なにか喋った？」

「なにかって？」

上田が吐き捨てる。不機嫌そうに見えるが、これが彼の通常モードだ。

「一方的にやられてた原因とか」

「フム……。ヘマをやらかした、とは言ってたな。なんだ。あの男が気になるのか？」

悪役プロレスラーのような上田がニヤリと笑うと、凄みがある。

日々あらくれものの治療をしていればこうもなるのだろう。

白衣も着ていない上田の横には治療中の患者が居る。いや、治療はしていない。放置中というべきか。

『いたたた～！　痛いよ、せんせ～、どうにかして～！』

ストレッチャーの上では日本語の分からない香港人が広東語で喚いている。まだ若い男だ。

上田は上田で、日本語しか分からないので、こういう内科の患者はほとほと困る。居合わせた沙龍が通訳をする羽目になった。

この前まで通訳兼助手の若い中国人留学生が居たのだが、行方不明で、もう一ヶ月も見ていないそうだ。「あー、それは死んでるね」と沙龍が言ったら、上田は渋い顔をしていた。

「気になるのは加納ちゃんじゃなくて、殴る蹴るをしていた台湾人のほうね。……腹が痛いってさ。今までに感じたことのない痛みらしい。食中毒かもしれないって言ってる」

「食中毒ならそんなに喚けるもんか。腹？　どこだ。胃か？　腸か？　すい臓か？　じゃあ、お前さん、いい男はいないのか？」

「カレシならできたよ。ホヤホヤのが。……どこにすい臓があるのか知らないってさ。とりあえずここが一番痛いって」
と、男が押さえている胃の下あたりを、上田に示した。
「この位置は腸だな……。面倒だからユウユウのところに回そう」
上田の決断は早い。既に携帯電話を耳にあててコールしている。
『痛い～、せんせ～、死ぬ～！』
その間も、患者は情けない声で呻いていた。
「あー、はいはい。美人のセンセーが診てくれるから、もうちょい我慢しろ。……あ、ユウユウ先生？　患者ひとりまわしていいか？　どうも急性腸炎っぽいんだが……」
歌舞伎町にはもうひとり、内科医が居る。こっちはカタコトの日本語しか話せない中国人なので帯に短し襷に長しなのだが、日本人の看護婦がひとり居るのでなんとかなっていた。
「美人って……、オカマじゃん」
沙龍は日本語で呟きながら笑って、

『大丈夫、今から内科医の先生のところに行くから。この先生よりは優しいよ』
患者にはそう言ってやった。
ドクターユウユウは上田以上に有名人なので、沙龍もよく知っている。大柄な美人といえなくもないが、一見して男だと分かる体格をしていた。二丁目で働いていてもおかしくないタイプだ。上田と違って、常時白衣を着ているが、その下はだいたいいつもボディコン、ハイヒールというバブル期の六本木スタイルを貫いている。
「え？　福建？　いや、香港の人みたいだけど。……ああ、分かった。謝謝。じゃあ、すぐ連れていく」
電話を切った上田は、沙龍にも手伝えと言って、患者を担ぐ。背負うのは上田ひとりで充分そうに見えたので、沙龍は青年の荷物と、さっき上田が書いていたカルテらしきものを持った。
「福建がどうしたって？」
暗い通りに出てから、沙龍は上田を見上げて聞いた。
「んー、なんか、福建人はお断りって言ってた。暴れるのや、治療費踏み倒すの

が多いからなぁ……」
「ふぅーん」
『痛い……、痛いよ～』
ふと後ろを見ると、今夜も巨大な不夜城はネオンが煌々と灯って、光の粒を周囲に撒き散らしている。ここは帝王不在の城だな、と沙龍はなんとなく思った。

ドクターユウユウは、上田の隣に居る沙龍を見て、目をパチクリさせた。
「あらやだ～、患者って沙龍チャンなの？」
白衣と、レモンイエローのワンピースと、真っ赤なハイヒール姿のユウユウは、沙龍とはだいぶ前からの知己である。以前、なにも知らない日本人の酔客が、ユウユウに因縁をつけていたことがあって、それをコンビニの入り口でやるもんだから、ムッとした沙龍がその酔客をＫＯしたことがあったのだ。
歌舞伎町に出入りする者なら、上田やユウユウの顔を知っているし、彼らはアウトローといえど、医者に手を出すことはない。兵士が敵の軍医には決して手を

出さないのと同じ理屈だ。
しかし、たまにその酔客のような馬鹿が居る。彼もオカマが嫌いな普通のサラリーマンだったのだろうが、ゲイやダイクがたくさん居る環境で育った沙龍にはそういう偏見野郎が許せなかったのだろう。
KOしたのは「入り口をふさいで邪魔だったから」と言っていたが、ユウユウには沙龍の本心が分かった。
以来、ユウユウは沙龍のことを「小さな女侠」とからかって呼んだりしている。沙龍が甲斐馨ではなく中国名のほうを名乗ったのも、彼女（正確には彼だが）が上海出身だったからだ。
「ユウユウ先生、こんばんわ。違うよ。患者はこっち」
と、上田の背中を指す。
「おう、頼むぜ。こいつ、どこにおろせばいい？」
表情の動かないマネキンのような看護婦が壁際の寝台に寄って「こちらへ」と言った。
「あらん、若いボーイなのネ……」

ユウユウは妖艶に笑って、早速、呻く患者の体をまさぐっていた。
退院するとき、彼の大事なところは無事だろうか。それは神のみぞ知る。

香港人の患者は点滴でなんとかなったらしい。やはり急性腸炎とのこと。
上田はラーメン屋でその報告を受けた。もう深夜に近い時間であるが、沙龍が腹が減ったというので、ふたりで食べにきている。この組み合わせは親子にしか見えなかった。
「……で、加納ちゃんを痛めつけていた台湾人に心当たりは？」
「それ、さっきも色々聞いてたな。なんか面倒なことに首突っ込んでんのか？」
「面倒なことに巻き込まれないために聞いてんの」
「フフン、知らぬが仏って言葉もあるんだぜ？」
「なにそれ？」
「知らなきゃ平穏でいられる。が、知ってしまえば余計な苦労もしんどい思いもするって話よ」

「……」
一理ある、と思った。
上田はそうやって生きてきたのだろうか。
「あ、替え玉お願いしまーす」
沙龍がカウンターの中に声をかけると、店主が「えっ？」という顔をした。三つめなのである。沙龍のどんぶりはそろそろ汁がなくなっている。
ちなみに、ラーメンを食べる前に餃子とチャーハンを食べていたことを店主は忘れてはいない。
「……大丈夫？」
そろり、と替え玉をどんぶりに入れながら店主が聞く。
「なにが？」
ケロリと沙龍は言う。
「いや、お客さん、よく食べるね！」
「まあ、食べ盛りだからな。腹痛になったら診てやるさ」
隣で上田は笑っていた。

「美味しいからねー」
飲食業をやっている人間はこれを言われたらだいたいとろける。きっと、この店主は沙龍の顔を覚えただろうし、次に来たときはなにかサービスしてくれるかもしれない。
沙龍はこうやって人に気に入られるんだな、と木佐なら分析しただろう。
「心当たりな……」
沙龍がその話題を忘れた頃、上田が低い声で言った。
「うん？」
「なくはない。が、ここで言うのもなんだから、あとでメール送っておいてやる」
「……」
沙龍は黙って頷くと、紙ナプキンにメールアドレスを書いて、上田に渡しておいた。

翌日、上田からもらったメールは、意外にも長文で、沙龍の知りたいことはだいたい書かれてあった。

『実は、お前があのホストを連れてきた後、背骨と頭蓋骨のつぶれた中国人が俺のところに運ばれてきた。生きてはいたが、虫の息だった。たぶん、それが例の台湾人だろう。あの傷の具合は人間の力じゃない。高いところから突き落としたとか、そういう類だ。

ここでそいつを治すのは無理だから、金があるならもっと大きな病院に一刻も早く連れて行けと言った。そいつを連れてきた若い男は、絶望的な顔をして帰っていったが、その後は知らん。病院に連れて行ったとしても、助かったかどうか。五分五分だ。

虫の息の男は初めて見る顔だった（といっても半分潰れていた）が、若い男のほうは何度か見かけたことがある。コマ劇場の裏にある、台湾人がやってるマッサージ店（十八禁のやつだ。女ひとりではたぶん入れない）に出入りしてるボディガードだ。店の名前は忘れた。いつも黄色い立て看板が出ているからすぐ分かるだろう。

加納というホストは、退院した後も菓子折り持って現れたぞ。律儀な男だな。一応、元気に働き始めたようだが、店を移るかもしれない、ってことを言っていた。まぁ、そのほうが無難だ。

お前もくれぐれも危ないことには首を突っ込むなよ。』

6　依頼

椎名は神楽坂に住んでいる。いままで住居は転々としてきたが、三十になって生まれ育った場所に戻ってきてしまった。

椎名の祖母はとある代議士の愛妾で、若い頃は評判の美人芸者だったらしい。その子供が、椎名の父親だ。認知はしてもらったが、代議士の姓を名乗ることは許されず、周囲からの冷たい視線の中で苦労して育った父親は、幼馴染と結婚して子供をもつが、まもなく失踪。それからしばらくして、母親は事故死か自殺か分からぬような死を遂げた。椎名は小学校を卒業するまで芸者の祖母に育てられるが、祖母が病死した後は親戚の家に預けられ、たらい回しにされながら高校を中退。その後も、波乱万丈に生きてきた。

いま、神楽坂は花街としての規模をだいぶ縮小してしまったが、石畳は当時のまま、風情のある佇まいを見せている。

棟門（むねもん）と呼ばれる屋根つきの門――沙龍の感覚で言えば、時代劇で同心などが住

んでいる家の門――をくぐると、細い小路が続いており、その両側には背の高い木々が家を守るように植えられていた。
玄関は開き戸で、曇りガラスが填められている。表札は出ていなかった。
「なんか、隠れ家みたいな家だね」
さっきまで畳や床の間をもの珍しそうに眺めていた沙龍が、やっと落ち着いた様子を見せてそう言うと、椎名は頷いていた。
「まぁ、実際、隠れ家だったんだろうな……」
当時、代議士が休息所として使っていたこともあるのだろう。
この家だけは手切れ金がわりに貰い受けたらしい。祖母は亡くなるまでずっとここに住んでいた。椎名も小学校を卒業するまでは一緒に暮らしていた家だ。部屋は居間の他に三つある。
「コーヒー、飲むか？」
「うん。ありがとう」
沙龍を居間に残し、厨房に立つ。
戦前に建てられた日本家屋なので、どこもかしこも旧式だが、それほど不便は

なかった。厨房にはかまどもそのまま残っているが、いまは使っていない。お湯はガスコンロで沸かす。

（驚くな、我ながら）

椎名は、徹夜明けで少々ボーッとしている。

いままで、それほど女性遍歴を重ねてきたわけではないが、ここに恋人を招いたことはない。よくも悪くも思い出深いこの家は、彼にとっての聖域なのだろう。

しかし、今朝、沙龍が電話をしてきたとき、うちに来るか、と言ってしまった。そのことに自分でも驚いている。

「日本家屋が珍しいのか？」

コーヒーを淹れて戻ってくると、沙龍は洒落た木製の窓枠を食い入るように見ていた。

「うん。すごい色んなところに手がかかってるね。お金持ちが建てたんだろうなーって」

「……」

外国育ちでそれが分かるのか、と思った。
いや、分かるのだろう。沙龍の言動の端端には、一流を知っている者の余裕が見え隠れするときがある。ただ、本人はそれを、否定気味に捉えているところが不可解というか、謎ではある。
「うん、コーヒーも美味しいです」
「そうか。よかった」
その綻んだような笑顔には、沙龍のほうがドキッとした。
椎名は区外に仕事用のワンルームマンションを借りていて、そこで寝泊りすることもあるそうだが、基本的に「家」はこちらのようだ。今朝、沙龍が電話したときも、仕事部屋に居たのだが、神楽坂に寝に帰ると言って、ついでに沙龍も誘ったのである。
「今日は仕事、大丈夫だったのか？　誘っておいて聞くことでもないんだが……」
平日のブランチタイムである。沙龍は（一応）会社員なのだから、普通なら、カレシの家でのんびりしていていいはずはない。

「うちはフレックスだし、いま、私、仕事干されてるから。いいんだ」
「干されてる？」
椎名が顔をしかめる。
「いや……、うちの所長が、お前はしばらく仕事するなって」
「なんだそりゃ」
「まぁ、仕事の取り組み方についての見解の相違というか……」
ごにょごにょ言っている。年明けからこっち、沙龍の赤字仕事が続いたので木佐は呆れているのと怒っているのと半々で、「馨向きの依頼が来るまでは何もするな」と言い渡したのだった。
おかげで興信所仕事はしなくていいのだが、加納のことや、他にもなんやかんやあって、毎日はそう平穏無事でもない。
ただ、椎名との再会とその後の展開は、よい清涼剤にもカンフル剤にもなっている。願わくば、椎名もそうであるとよいのだが。
「シーナさん、疲れた顔してる。休んでいいよ。私のことは放っておいていいから」

「……」
椎名は考えるように間をおいて、
「じゃあ、添い寝してくれ」
我ながらいい提案だと思った。
きつい仕事明けで激しい運動をする元気はないが、彼女の吐息を抱きしめながら眠るのは幸せかもしれない。
「それ、言葉通りなの？」
「もちろん」

三時近くになっても椎名は目を覚まさなかった。疲れているのだろう。沙龍は書き置きを残して神楽坂の家を後にした。
仕事をしなくていいとはいえ、事務所の雑務くらいはあるし、風呂掃除は自分の仕事なのでひとまずは事務所兼居候宅に戻らなくてはならない。
木佐は出張中らしく、ここ数日会っていない。事務所に戻ると、千春がパソコ

ン仕事をしていた。
「おはよー」
「おはよう……ございます？　っていう時間でもないですけど。あ、そうだ、馨さん」
「うん？」
「昨日、ショーの後、歌舞伎町で例のイケメンのホストさんとばったり会って」
「ああ、加納ちゃん？」
「はい。なんか、自分に報告してくるのも変な話なんですが、たぶん、馨さんに伝えてくれって意味で言ったんだと思うんですけど……。あの人、今月いっぱいで新宿の店を辞めるそうです」
「やっぱり辞めるのか」
上田の言っていた通りである。
「で、おたくの興信所はどんな仕事でも請け負ってくれるのかって聞くもんだから、まぁ、依頼内容にもよりますって言ったんですけど。なんか、頼みたい仕事があるみたいで、今日、出勤前に事務所に来る、と」

「ふぅーん……。いいんじゃない？」
「でも、いま、所長がイタリアに行ってるから、最終的に請け負うかどうかの判断が、ですね……」
「はぁ？　キサさん、海外なの？　聞いてないよ！」
寝耳に水である。そういえば、木佐の顔をだいぶ見ていない。
「知らなかったんですか？　パソコンの共有スケジューラーも見てないとか？」
「キサさんとはここんとこ、ずっとスレ違ってたし……。パソコンも見てない。なんの仕事なの？」
「所長の叔父さんからの依頼だそうですよ。なんでも今度、イタリアに店を出す予定で、その準備を手伝って欲しいとかなんとか」
「あ～、あの叔父さんか～」
沙龍も何度か会ったことがある。黒田達彦のことだ。
いろいろとグレーな噂もある人物で、木佐はあまりよく思っていないようだが、『東新宿探偵社』の仕事として正式に請け負ったのなら、いまはビジネスライクにただのクライアントとして接しているのだろう。

「なので、その加納さんの依頼を……。あ、メールきた」
千春はその件で、木佐に問い合わせのメールをしていたらしい。
「『今月は厳しいので依頼はできるできないを問わず全て受けろ』って言ってますが……」
「できない依頼を受けてどーすんのよ……」
千春と顔を見合わせて、二人でため息をついた。
事務所の壁には、木佐が書いた標語が掲げられている。
『来る依頼は拒まず』
それが東新宿探偵社のモットーである以上、やるしかない。
加納の話が、それほど無茶でないことを祈ろう。

四時過ぎになって事務所に現れた加納は、今日も高そうな黒いスーツ姿だった。堅気の人間は決して手を出さないようなデザインであるが、加納にはよく似合っていた。また、それを自分でも理解している。本来、洋服を「着こなす」と

いうのはそういうことかもしれない。
加納はソファに座って話をする前に、何度か「危険を伴うと思います」と言ったし、「命の保障もできない」と言った。
「その点はお気になさらずに。危険を伴うことを前提で仕事をしていますし、うちに持ち込まれるのはそういう仕事ばかりです」
千春はそう言ってやった。
「……そうみたいですね。実は、とある方面から聞きました。あなたがたの評判」
どうせいい評判じゃないだろう、と言いたいのを我慢しながら、沙龍はお茶を出す。
話を聞くのは千春に任せた。
「破壊工作の見本のような仕事をする、とか」
「……」
「……」
微妙な褒め方だな、と千春も沙龍も思ったが、クライアント（候補）はお金様

なので、黙っている。もちろん、お金様云々は木佐小次郎が言っていることだ。
「それで、うちに頼みたい仕事っていうのは……」
「最初から話します。実は、いま、中国人と金のことでトラブルになってまして。発端はお恥ずかしい話ですが……、女です」
加納の話は意外だった。女は騙しても、騙されるタイプには見えないからだ。
「最初は、客として来た女です。普通の日本語を話していたし、日本人に見えました。でも、その正体は、中国人とのハーフで、とあるチャイニーズ・マフィアの情婦でした。とても見えないんですけどね。素人っぽくて」
「その女性の名は？」
「浜田美枝。でも、おそらく偽名ですよ。いまは東京から姿を消しました」
「写真は？」
「これしかないです。写り悪いんですけど……。年は二十歳と言ってましたが、もしかしたらもっと若いかもしれません」
加納は携帯電話の画面を見せた。加納と、あまり化粧っけのない笑顔の女性がふたりで写っている。確かに、マフィアの情婦には見えない。

千春は、その写真を、事務所のメールアドレス宛に添付して送るように言った。

「女は、俺と関係を持って一ヶ月もしないうちに居なくなりました。その後、すぐ、台湾マフィア……、天幇（ティエンパン）というらしいですが、そこのメンバーが俺の勤める店に押しかけて来たんです。ボスの女を寝取ったと喚きながら。ご丁寧に、証拠の写真を持って。それで、すぐ嵌められたことに気付いたんですが、うちの店にもボディガードが居ましてね、それとやり合う形になったんです。店は荒れるし、けが人も出て、ひどい有様です。騙されたとはいえ、俺の責任ですからね。店は辞めることにしました」

「……その台湾人たちはおとなしく引き下がったんですか？」

千春がメモを取りながら聞く。

「奴らが欲しいのは金だけですよ。女の件では、俺も謝罪金としてまとまった金を渡したので、奴らも一度は引き下がりました。でも、一度じゃ済まないんですよね、こういうのって。つけあがって何度もせびりに来るので、二回目以降はきっぱり断ったんです。そうしたら、台湾人の三人組に襲われました。それが、

甲斐さんに助けてもらった日です」
「……」
沙龍はここまでに福建という言葉が出てこないのを奇妙に思っていたが、それはきっとどこかでつながるのだろう。それよりも、厄介な名前が出てきてしまった。
（天幇（ティエンパン）、ね……）
沙龍はやや上海モードになりかけている。その名は、上海に居たときも何度か聞いたし、張は台湾マフィアに対しては絶えず目を光らせていた。
本土の中国人と台湾人の関係というのは、とても複雑なのである。民族は同じだが、互いにそうは思っていないのが難しいところで、さらにここに香港人というカテゴリーがくわわると日本人には理解不能となるだろう。
この三者を説明するには歴史を語らなければならないので割愛するが、日本でいう関東人、関西人、鹿児島県民、というカテゴリーくらいで説明できるような生易しいものではない、ということだけは記しておこう。
「えーと、そのなんとかっていうマフィアは……」

千春がメモを取るのに苦慮しているので、沙龍が言ってやった。
「天幇。台湾一のマフィアだよ。ボスって陳阮蔡のこと？」
後半は加納に聞く。
「いえ、本家のじゃなくて……。日本に居るグループのボスって意味です。林（リン）という男です。四十代くらいの小太りで、いつもそれっぽいスーツを着ています。真っ黒だったり、ストライプがはいってたり。ちっとも似合ってないんですよ、これが。なんか映画の猿真似で滑稽なんです」
「あ、そう……」
さすが、着るものにはうるさい。
「強請りをやめさせるには、もう、この男に直接談判するしかないと思って。腹をくくって乗り込むつもりでした。でも、アジトも知らないし、さすがにひとりでは生きて帰って来れそうにないですからね。あなたがたには直談判のセッティングと、立会いをお願いしたいんです」
「んーーーーー……」
沙龍はだいぶ長いこと唸っていた。自分はもう蒼龍会とは無関係のつもりだ

が、周囲はそう見ていないので、天幇の連中ももしかしたらなにか嗅ぎ付けているかもしれない。その場合、加納の立会いをするということは、蒼龍会の看板を背負って彼らと対峙することになりはしないか。いくら、自分が興信所の職員だと主張したところで、それが通用するとは思えない。

いま、蒼龍会と天幇は敵対はしていないが、沙龍の行動次第ではそうなる可能性もある。うかつなことはできなかった。

「結論を出すのはちょっと待って。つまり、加納ちゃんとしては、台湾のやつらに強請りをやめてもらえばいいんだよね？」

「そうですが……。直談判以外にいい手がありますか？」

「それはいまから考える。一般人が機関銃持ったマフィアの根城に乗り込むのは狂気の沙汰だよ」

「俺も武装しますよ」

「簡単に言うね。銃を撃ったことは？」

「ないですが……」

そのやり取りを黙って聞いていた千春が、おもむろに聞いた。

「その……、馨さんはあるんですか？」
「あるよ。命中率悪いけど」
「そ、そうですか」
「依頼は受けるよ。至上命令だからね。でも、内容は『台湾人から加納ちゃんのお金と命を守る』に変更しよう。それでも構わない？」
「……はい」
悩んだ末に加納は了承した。
「あと、できれば『店に迷惑をかけずに』っていう点も加えてください」
「うん。要望については最大限努力する。保障はできないけど」
「加納さん、今月いっぱいはお仕事されるんですよね？　いつまた台湾人が襲撃してくるか分からないなら、二十四時間、ボディガードは必要だと思います」
千春が事務的に言った。
「そう、ですね……」
だいぶ不満そうだ。
「自分は武道の心得はないので、彼女が担当しますけど、よろしいですか？」

「えっ……」
加納は沙龍を見た。戦闘要員はこちらなのか。
やはり、あの晩に台湾人の男三人をちぎって投げたのは彼女だった。
「面白くないだろうけど、また闇医者の世話になりたくないなら、我慢してね」
沙龍は椎名にメールを打ちながら言った。
『しばらくそちらには行けません。代わりに添い寝してくれるスタッフを派遣しておきます』

昼間の新宿中央公園は、サラリーマンやＯＬの憩いの場になっている。
夜にはこの風景も一変するのだが、いまは長閑な昼休みだった。天気もいい。
噴水の横では、ジャージ姿の加納が、だいぶ息があがっている。沙龍もジョギングスタイルだが、こちらは涼しい顔。
ナンバーワンのホストは日々のワークアウトも欠かさないらしい。数キロのコースを走り終えたところである。

「ハァ……ハァ……」
いい加減、張り付いているボディガードがうっとうしくて、せめてジョギングの間くらいは引き離そうとしたのだが、無理だった。自分のほうが息が上がってしまった。
「……視線を感じる」
ふと、沙龍が水筒に口をつけながら言った。
「え？」
「殺気はないけど……。なんか落ち着かない」
「台湾人ですか？」
身を硬くした。痛めつけられた記憶はまだ生々しい。
「いや……、たぶん違う。加納ちゃんの関係者じゃないな」
これはだいぶ前から沙龍が感じている、心配性の家族が遠くから見つめているような視線だ。反抗期の子供なら「大丈夫だってば！」と叫びたくなるような。
「……」
なぜそういったことが分かるのだろう、と加納は思ったが、口にはしなかっ

た。どうせ聞いても分からない。
「それにしても、甲斐さん。鍛えてるんですね」
「え、全然してないよ？」
たぶん言っているレベルが違うのだろう、と加納は思った。彼女なら楽々十キロくらい走れそうだ。
「ちょっと、休憩します」
空いていたベンチに座って一服する。沙龍はまだ件の視線が気になるようで、覚られぬように周囲を探っていた。
加納のボディガードを始めてから三日経っていた。
沙龍は加納が店に居る間は、炊事場で皿洗いをしている。マネージャーに事情を話し、安い時給でいいからと頼み込んで、アルバイトとして雇ってもらったのだ。マネージャーは加納の味方なので、無理が通った。事情を知らないリョウは三角巾をかぶった沙龍を見て、「なに？　お金ないの～？」と笑っていたが、薄々感づいているのかもしれない。だとしても、なにも言わないのが彼なのだが。

沙龍は、ホストクラブというものに初めて潜入したが、そこで毎晩繰り広げられる風景はそんなに珍しいものでもなかった。自分だって上海では黒服に囲まれていた。煙草をくわえれば、火が差し出されるし、指をならせば飲み物が用意される。ここでは、男は女を女王様にするために存在しているのだ。

「馬鹿馬鹿しい世界だと思ったでしょ」

昼間の公園のベンチという、夜のホストクラブとは真逆の場所で、加納が紫煙と共に吐き捨てた。

「……？」

「ホント、馬鹿馬鹿しいですよ。男の気を引くために一晩で百万も使って、飲みもしないドンペリ頼んで、時計だのライターだのジャラジャラ貢いで……。馬鹿でしょ。彼女たち。なにしに来てるんでしょうね。支払いにローンまで組んで。会社の金でホスト遊びしちゃう人まで居て。なんて馬鹿な女たち。俺たちは女に金を使わせることに、これっぽっちも罪悪感を感じていないのに。女を騙して金稼いで、人生チョロイですよ」

「……」

「でも、きっとキャバクラでは同じことを女が思ってるんですよ。馬鹿だな、このオッサンたち。こんなに大枚はたいて、そんなに若い女と喋りたいのかって。ちょっと太ももを触らせて、甘えた声でねだれば車もマンションも買ってくれる。人生チョロイな、って」

「……」

こういうときは「なにも反応しない」に限る。沙龍は黙っていた。加納は愚痴を言いたいだけなのだ。

「甲斐さん、俺ね、最初は貴女もそんな馬鹿な女のひとりだと思ってた。なんでこの馬鹿女はひとりで歌舞伎町をうろついてんだって。絡んでくれ、って言ってるようなもんじゃないかって……。でも、興信所の職員だって聞いてからは、それもきっと仕事の一環なんだろうな、って気付きました」

「ああ、まぁ、仕事のときもあるけど……」

なんとなく後ろめたくなる。歌舞伎町をぶらぶらするのはただの近道だったり、ご飯を食べにきただけだったり、というほうが多い。加納が言うほど沙龍は真面目に仕事をしているわけではない。

「リョウ先輩も、甲斐さんのことはどこか一目置いてるようです。あの人、甲斐さんのこと、決して客としては誘わなかったでしょ？　それがいい証拠です」
そう言って、加納はため息のように笑った。
ホストに限った話ではないが、こういった水商売では、好きな人ほど、店には来てほしくないものだろう。
「加納ちゃん、あなた、疲れてるのよ」
昨日見たアメリカのドラマのセリフを真似てみる。そうやって冗談にでもするしかない。加納は一緒に見ていたから、すぐに分かっただろう。
「確かに、疲れたのかもな……。ずっと、走りっぱなしだ」
加納は沙龍の冗談には付き合わず、ただ、本当に疲れた声を絞り出していた。

その頃、神楽坂では、椎名が届いた宅配便のダンボールを開けて笑っていた。
抱くのにちょうどいい大きさのパンダのぬいぐるみが鎮座していたのだ。

7　眷族

「あれ？　馨君、珍しいの連れてるね。どうしたの？」
松木ゴローと出くわしたのは、人通りの激しい靖国通りだった。時刻は夕方で、そろそろ歌舞伎町にもネオンが灯り始めている。
遊ぶのは専ら六本木の彼が、新宿などという似つかわしくない場所に居る理由が気になったが、いまは仕事中なのであまり長話もできない。隣に居る加納は伊勢丹で買い物がしたいらしいのだ。早くしないと、ホストクラブのほうが開店時間になってしまう。
「ああ、この人は依頼人で……」
加納のことを言っているのだと思ったので、説明しようとしたのだが、
「ううん、そうじゃなくて」
松木は加納に対してにこやかに笑ってみせ、「ちょっとお時間ごめんなさい」と会釈した。そして、

「これ」
と、沙龍の右肩あたりの空気を掴むような仕草を見せる。
「……？」
「馨君は強いからさ、こういうの、近寄れないはずなんだけど……」
「え？　なんか憑いてたの？」
松木は霊感が強いので、普通の人には視えないものが色々と視えるらしい。
沙龍は自分は視えないものの、こういった松木の言葉は信じている。
「うん。なんだろう、これ……。キーキー言ってるけど……。トカゲみたいな可愛い子」
「トカゲ？」
「ああ……、そういうこと……？」
「なに？　ひとりで納得しないで」
「いや、ごめんごめん。分かった。邪魔しないよ」
松木は、掴んでいたものを元に戻すと、また、にこやかな笑顔を見せた。
「イケメンさんも、足を止めちゃってごめんなさい。馨君、またね」

「うん……」
不可解だったが、松木にはまた聞く機会もあるだろう、と思った。
しばらく歩いてのち、加納が不審な顔で聞いてくる。
「誰です？　今の」
「占い師の友人なんだけど、ちょっと変わった人で、たまにうちの仕事も手伝ってもらったりしてる」
「へぇ……。すごいいい時計してましたけど、占い師って儲かるんですね」
やはり職業柄か、他人の身の回り品には目がいくらしい。
「お金持ちのボンボンだからね。本当は働かなくていいくらい。占い稼業も趣味でやってる感じ」
「ああ、俺の一番嫌いなタイプですね」
加納の言い方には、沙龍が少し眉を動かすほど、暗い憎悪めいたものが混ざっていた。

同日、コマ劇場の裏にあるマッサージ店に偵察に行ってきた宇佐美は、特に怪しまれることもなかったという。ああいった店では、初心そうな日本人はカモとして歓迎されるのだ。

店を出て、駅前に戻り、宇佐美はすぐに沙龍に電話してきた。いまは地下駐車場の、車の中だろう。雑踏の中でする話ではない。

「最初は一時間八千円の、ただの全身マッサージなんだけどさ、途中で女の子がカタコトで『もっといいコースがあるよ』って言ってくるわけ。まぁ、よくあるパターンね。値段を聞いたらだいぶボッタクリなんだけど、サラリーマンが小遣いで払えるギリギリの値段にしてるところが上手いね」

「店内に男は居た？」

「うん。若いのが奥に二人ほど居たね。一人は馨ちゃんがくれた隠し撮りの写真の男で間違いないと思う。もう一人も、林ではないな。聞いていた風貌とは違った」

「客はほとんど日本人なの？　出入りしてるので、他に怪しいのは？」

「入れ替わりに来たサラリーマン二人組は日本人だったよ。まぁ、ああいう感じ

のスケベ会社員をターゲットにした店なんだろう。裏口があるから、といっても、すぐ横についてるから表からも見えるんだけど、関係者はそっちから出入りしてる。店に入る前に一時間ほど眺めてたけど、特に怪しい出入りはなかったな。林らしき男は来てなかった」

「ふぅーん……」

『ミヤビ』の炊事場から路地に出たところで電話をしている。そばにはビールケースや木箱が雑多に積んであった。

ちょっとカレシに電話してくるー、と言って出てきたのだ。同じ炊事場で、つまみなどを作っている料理人は「はいよ」と言って見逃してくれた。

路地裏から表通りをなんとなく眺めていると、剣呑な顔をした男が数人横切った。一瞬のことだが、沙龍は、彼らの正体と目的が分かった。

「ウサミミ、ビートルの中だな？　区役所通りに横付けで待機！」

それだけ言って電話を切ると、炊事場に戻った。

「佐伯さん、ここ、鍵かけて！　誰も入ってこないように、なにか重しを！」

料理人に言うと、返事を待たずにフロアーに躍り出た。フロアーには出ないで

ね、とマネージャーには言われているが、緊急時はそれも守れないと言ってある。

沙龍がフロアーに一歩踏み入れたところで、入り口のほうから悲鳴があがった。同時に、なにかが倒れる音。そして、銃声――。

フロアーで接客していたホストはなにごとだ、と腰を浮かすも、咄嗟には動けない。沙龍はその間を数歩走り、最後は低く一直線に跳躍した。

受付を過ぎたあたりで大きなハンドガンをマネージャーに向けていた男は、その腕ごと沙龍に掴まれ、直後、顎をくだかれた。男が弾みで撃った弾が、シャンデリアをくだく。また悲鳴――。

取りこぼした銃は放っておく。

襲撃犯はもう二人居るが、幸い、入り口がそれほど広くないので、時間的な余裕はあった。

受付の前ではリョウが倒れている。隣には悲鳴を上げ続ける女。

沙龍がもう二人の男を同時に殴り倒した後で、加納と店長が駆けつけた。

「救急車呼んで。リョウちゃんが撃たれた。通報が嫌なら、上田先生を」

「はっ、はい」
マネージャーがいちはやく正気に戻って受付のところにある電話の受話器をあげた。
「加納ちゃん、その女の人を落ち着かせて。店長はタオルかシーツを。止血する。早く」
三角巾をかぶった年端のゆかぬ少女が、テキパキと指示を出しているのだ。
なにか、映画のワンシーンでも見ているのではないか、と、フロアーのホストと客は唖然としていた。
「残った人で動ける人は、倒れてる男をしばりあげて」
ようやく他のスタッフが半信半疑という体でのろのろ動き出すが、マネージャーにそれを叱咤されていた。
リョウは腹を撃たれているが、沙龍の経験上、これなら助かる。
しかし、
(変だな……)
沙龍はそう思った。

金を払わないホストへの見せしめとして、店の人間を全員撃ち殺すつもりで来たのなら、三人は少なすぎる。
注意深く入り口の向こうを覗きながら、携帯電話を取り出す。さきほどの着信にかけなおすと、宇佐美がすぐに出た。
「そこから『ミヤビ』の入り口、見えるでしょ？　人影はある？」
「うん、確認してるんだけどさ……。なんか、四、五人、倒れてるよ？」
「え!?」
沙龍は転がっていたハンドガンを拾って、階段を上っていった。『ミヤビ』の入り口は半地下にあるので、階段といっても数段のお飾り程度だが、赤いじゅうたんが敷かれ、豪華に演出されている。
仰々しいアーチつきの階段を上り切ると、そこには、いつもの不夜城の喧騒はなく、ただ静かに、血と硝煙の匂いがしていた。
「……」
宇佐美の言う通り、同じような背格好の中国人たちが倒れている。血の流れ具合からして、確実に死んでいるようだ。

「晩上好、小姐（シャオチェ）」
「……」
沙龍は一瞬迷った。
自分の持っているこのハンドガンを、彼女に向けるべきなのかどうか。
しかし、ジンはいまは何も持っていない。持っているのはメンソール風の細い煙草だけ。優雅に一服しているだけだ。
ただ、優雅に――、というのは沙龍から見た感想であって、ジンはやれやれ、という少々やぶれかぶれな気分なのである。本当は、裏方に徹しなければならないのに。上司の言いつけを破ってしまった。減俸ものだ。
『老板（ラオハン）、ご命令を』
ジンは広東語で言った。その言葉で沙龍は全てを理解した。
通常、組織のトップは「老大（ラオダー）」と呼ばれる。「老板」は店長くらいの意味しかない。
しかし、蒼龍会ではわざとこの軽い言葉が使われていた。「小姐」もそうである。「お嬢さん」という意味だが、これは食堂のウェイトレスに対しても軽く使

われる言葉だ。なぜ、そういった言葉をわざと使うのかというと、部外者の炙り出しのためである。
「元、だよ」
「そう思っているのは小姐だけですよ」
はぁ……、とため息が出る。
しかし、ひとつ安心したことがある。
「ジンが国家安全部のスパイじゃなくてよかったよ」
「そこからもスカウトされたんですけどね。給料安いので断りました」
にっこり笑って言う。
冗談なのかハッタリなのか真実なのか。案外、本当のことなのかもしれない、と沙龍は思った。
「貴女の上司はいま日本に居るの？」
董天だろう、と、もう分かっていた。
「いいえ、ずっと上海です」
なら、松木が言っていたトカゲみたいな子――青龍の眷族はジン経由でもたら

されたのか。彼女もまた、なにかしらの特殊な力を持つ者か、あるいは、ただの「媒介」か。
「いま、日本に居る蒼龍会のメンバーは？」
「わたしだけです」
「はぁ……、ふたりだけで天幇の連中と戦争しろって？　張はなにしてんのよ？」
「張大人は小姐に任す、と」
「……」
張はいつからギャンブラーになったのだろう。沙龍はいま自分がどう動くか、自分でさえ分からないというのに。
「なにか……、細工したのか？」
遠くに聞こえる人の声と、立ち上る煙のことを言った。
「ええ。コマ劇場でちょっとした騒ぎを」
見た目が派手なだけでほとんど殺傷能力のない爆発物を仕掛けてきたのだ。人の目をひきつけるために。

どうやら彼女は色んな教育を受けてきた女性らしい。
「ジン、本名は？」
それを聞くということは、大げさに言うなら命を差し出せ、と言っているのと同じだった。本名を呼んでいいのは、親と主君だけである。
「日本名は、青江静香。父が日本人、母が中国人です」
「静かなジン……。なるほどね」
沙龍は最初に会ったときに、ジンが言っていた言葉をやっと理解した。
そろそろパトカーの音が聞こえる頃か。沙龍はジンについて来い、という仕草を見せ、区役所通りへ向かった。宇佐美の待つビートルにふたりで乗り込む。
宇佐美が「あれ？」という顔をしたが、沙龍は「無問題」という顔をして見せる。
「私は戦争はしないよ、ジン」
座席に落ち着いてから、沙龍が言った。
「ですが……、あれだけ殺しましたからね。林大人もお怒りでしょう」
「先に手を出したのは向こうだ。林には納得してもらう」

「それでも、落としどころは、必要ですね」
「さて、どうするか……」
沙龍が呟いたとき、携帯電話が鳴った。千春からだ。
「春ちゃん？　いまどこ――」
「横浜です。見つけましたよ、浜田美枝」

8　魔性の女

不思議なことに『ミヤビ』の襲撃事件については、なにも表沙汰になっていなかった。

あれだけの死体を誰がどう処理したのか、リョウも加納も見当さえつかなかったが、その方が幸せなのかもしれない。

事件については、中国マフィアの抗争に巻き込まれた、ということでスタッフも客も納得するしかなかった。店のボディガードは、事が終わった一時間後に現れたが、「災難だったな」と言って帰っていった。あの日、彼らが常駐していたとしても、沙龍のような働きはできなかっただろう。

リョウはしばらく上田のところに入院していたが、精神的には大してダメージも受けておらず、むしろ、銃で撃たれたことを看護婦相手に自慢していた。

この看護婦は、ユウユウのところから手伝いに来てくれているのだが、なにをしても表情が動かない。冷静沈着というよりは、機械人形のようだ。青龍刀を振

り回したヤク中の患者に、鎮痛剤の強い注射を一本打っておとなしくさせたという逸話もあるらしい。
「めぐみちゃんさー、もっと愛想よくしたほうがモテると思うよー？　美人なんだしー」
そんなことを言っても、たいてい黙殺されて終わる。
「クール・ビューティーもいいけどさー、俺はもっと笑ってくれる子のほうが好きだなー。あ、俺に好かれてもしょうがないか。ハハッ」
リョウもホストなので、口の巧さには自信があるのだが、めぐみは結局ニコリともしなかった。
見かねた上田が教えてくれた話によると、彼女にはだいぶ特殊な生い立ちがあるらしい。
「あの子は、小さい頃、飛行機事故に遭ってな。一緒に乗っていた両親兄弟、一家全員が亡くなったんだ。彼女だけ助かったんだが、家族の死体の中で、何日も過ごしたんだとよ。発見されたときは、ひどい状態だっただろう。その後、数年間、口がまともに聞けなかったそうだ」

その後、めぐみは孤児院で育つ。精神状態は少しずつ回復し、会話ができるようにはなるものの、あまり人と話したがらず、看護婦の資格を取っても、普通の病院はすぐにクビになった。最低限の言葉しか話さず、表情がないので、同僚はともかくとして、患者から文句が出るからだ。

ユウユウのところに来たのは、五年ほど前だ。普通の人には危険で逃げ出したくなるような職場でも、めぐみにとっては天国だった。患者は無法者ばかりで気を使う必要もないし、無理に笑う必要もない。

「世の中、色んな人が居るんすねー……」

リョウはそう言うのが精一杯だった。

「でも、女性を笑顔にするのは、俺の天命なんで！」

諦めるつもりはないらしい。この脳天気さは、一種の才能である。

加納は何度かリョウのお見舞いに来たが、自身の仕事納めの前日になって、「もう来れなくなると思います」と別れを告げた。

『ミヤビ』での最後の日、加納は店長とも和解して、激励の言葉をもらっていた。

「店のことは気にすんな。対策をあちこち強化したから、大丈夫だ。お前も気をつけるんだぞ」
「はい……」
なんだかんだ言って、十六のときからずっとお世話になった人と店である。
感傷的にならないようにしていたが、思わず鼻の奥が熱く詰まる。
店長は最後に、こんなことを言っていた。
「実はな、後出しみたいでナンだが、俺はいつかお前が女で失敗するんじゃないかと思っていた。いや、恐れていたというべきか。お前は仕事は丁寧で完璧だし、女の扱いも上手い。だけど、リスペクトがない。女ってものを軽蔑している。まぁ、そんなホストも多いんだが、それじゃ、この業界で五年十年とやっていくことはできん。途中で息切れして、疲れちまうぞ。俺はそんなホストをたくさん知っている。お前はまだ若いんだから、あんまり凝り固まるな。いいな？」
千春に頼んでいたのは、浜田美枝の捜索ではない。福建人たちの隠れ家の捜索

である。
「周爺さんは中華街では台湾語はそれほど聞かないが、閩語(ビンゴ)はよく聞くと言っていた。恐らく、その近辺に、福建人のアジトがあるんだろう」
沙龍はそうアタリをつけていた。
なぜ福建マフィアの動向まで探ろうとしていたのかというと、いざとなったときに台湾勢力にぶつけるためだが、ここで思わぬ収穫があった。浜田美枝である。
「あそこです」
ビートルの助手席に座っている千春が、瀟洒なマンションを指した。運転席には宇佐美、後部座席には沙龍が居る。
石川町の駅から、それほど遠くないエリアである。
「家賃高そうだなー。新築？」
十階建てで、外壁は濃い色をしている。明らかに富裕層向けのマンションだ。
「建ったのは去年だそうです。問題の部屋の所有者は村岡という日本人ですが、賃貸に出しているみたいで、実際の管理は不動産屋に丸投げしてます。浜田美枝

が入る前は、胡散臭い中国人たちが出入りしていたと、隣の住人が言ってました」
「……ほほう」
「いまは女の他に一人だけ、出入りしてる男が居るそうです。風貌を聞いてみたら、どうもそれが……」
「当ててみせようか？　元竜門会のリーダー、徐栄福（シュロンフー）だろう？　留学生くずれの」
「ワオ、なんで分かったんです？」
「……勘、と言いたいところだけど、実はそういうのをがっつり調べてくれていた人が居てね」
「この前のべっぴんさん？」
宇佐美がハンドルに顎を乗せたまま聞いた。
「そう」
「えーと、じゃあ、つまり？　その美枝ちゃんって子は、台湾マフィアのボス、林の情婦で、加納ちゃんを嵌めた子で、さらに、福建マフィアのボスの女でもあ

るわけ？」
千春の手にある、コピー用紙に印刷された写真を見て、宇佐美が言った。
「そう」
「す、すごいね、それ。よくバレなかったね？」
「いや、徐は承知してるんだろう。林は騙されてたのかもしれないが。いずれにしろ、魔性の女だな」
「魔性の女、かぁ。まだ二十歳そこそこの子なのに……。怖いねぇ」
中年の、こう見えて色んな経験をしている宇佐美がそんな風に言うのがおかしかった。
「自分は、馨さんのほうが怖いですが。いろんな意味で」
千春が笑いながら言っている。
「なに言ってんの。世界一怖い女は私のお姉ちゃんだよ」
沙龍は沙龍で、碧媛（へきえん）のことを言っている。身内ほど怖いものはないのだ。
その後、沙龍は二人を車に残して、自分は徒歩で中華街に向かった。
周爺さんの長男が経営する雑貨店の隣に、刀削麺の美味しい店がある。長男の

嫁の弟がやっている店だ。この店舗の厨房の脇、三畳ほどの個室でジンが待っていた。商談のために使いたい、と言ったら周爺さんが用意してくれたのである。

今日は地味なスーツに黒ぶちめがねまでかけて、どこかの秘書のようなスタイルである。そのジンが、一枚の名刺を差し出しながら言った。

「林も徐も、裏から入管に働きかけて強制送還を食らわすことはできます。それが一番簡単でしょう。どちらもナンバー2は居ますが、カスなので、まとめる力はありません。日本での福建勢と台湾勢はそれで一掃できるはずです。しかし、沙龍様が組織の力は使いたくないと子供のようなダダをこねるので、そうなると……」

「……なんか、さすが、董天の部下だわ」

表情変えずに毒舌を放つところとか、ボスにずけずけと嫌味を言うところがそっくりである。

「そうなると、手足をもぐしかありませんね。何人か、殺しますか？」

それと、物騒なことをお茶でもすすめるような口調で言うところも。

「私は、戦争はしないよ、ジン」

「……」
ジンは息を呑んだ。
それを聞くのは二度目だ。この前よりも、「私は」のところが強調されている。
これは沙龍の警告である。ジンはそれが分かったので黙って頷いた。
「この入管のお偉いさんはどうやって篭絡した？　ジンがタラしこんだのか？」
名刺をヒラヒラさせて聞くと、ジンが苦笑した。
「いえ。ずいぶん前から買収してあるそうです。張大人の命で」
「なるほど。やることはやってるのか」
つまり、誰を日本に入れて、誰を引き上げさせるかは、張の意のままなのである。それに気付いていない福建勢も台湾勢もある意味おめでたい。しかし、入管を押さえたところで、不法入国の方法は他にもある。密航だ。漁船でひっそり入国されてはどうしようもない。
「それから、福建の竜門会の老大が、離反したグループには偽造パスポートが手に入らないよう、手を回したようです。歌舞伎町の福建人たちが焦っているのは

そのためですね」
「周爺さんの言ってた話とつながるな……」
しかし、竜門会の老大にそれをやらせたのが張だとしたら、行き場のなくなった福建人たちが暴れるのも張は分かっていたはずだ。
（その上で、ジンを私に接触させたのか。蒼龍会の力を借りなくてはいけないような状況を作った上で……？）
さすがにそれは深読みしすぎかもしれない。しかし、沙龍はそう思うことで、決意を新たにする必要があったのだ。
スッ、と名刺はジンに返した。
「甘い話なんだけどさ。私がやってるのは興信所の仕事だからね。蒼龍会の力を借りずに、加納ちゃんを台湾人から守りきることができれば私の勝ちだ。だから、いまも友人の静香ちゃんの力を借りてるだけだと思ってる。……笑っていいよ」
「……いえ」
ジンは笑わなかった。沙龍の意地は分かる。李沙龍は、張という狡猾な大人に

担ぎ上げられただけの老板だ。彼女は最初からそんなものを望んではいなかった。運命としていったんは受け入れたが、それを断ち切るために日本に来たのである。ここでズルズルと張のお膳立てしたゲームをただなぞるわけにはいかない、ということだろう。

「二、三日、双方の兵隊を動けなくする策は必要だな……。なにかある？」

「そうですね。いくつかありますが、平和裏に進めるなら、食中毒か、一斉摘発の噂を流すか、あと、あまり効かないんですけど、心霊現象とか」

「フム……。食中毒ね」

沙龍は運ばれてきた刀削麺を見て、それも悪くない方法だと思った。ユウユウの仕事は増えるが、それは許してもらおう。

「それと、浜田美枝の件ですが……。徐との関係も含め、まだ分からないことが多いので、もう少し探らせてください。なぜ林を裏切ったのかっていう部分については少々心当たりがあるんですが」

「分かった。じゃあ、任せるよ」

その後は、欠食児童のようにふたりで散々飲み食いをして、テーブルに空の皿

を積み上げていた。
「このもちもちした麺、うまかー」
リョウがよく使う方言である。沙龍は耳がいいので、一緒に居る人のアクセントや言葉はすぐ覚えてしまうのだ。
「刀削麺というのは、山西省の料理でふが、チンギス・ハーンの孫、フビライのおかげでできた料理だと言われてまふね」
「へー？」
ジンの食べながらの説明によると、フビライの作った元王朝は、漢民族の謀反を恐れ、彼らからあらゆる武器を取り上げ、包丁までも制限した。そこで、一般家庭では包丁なしでも作れるような料理ができたというのである。
「名前に反して刀削麺はちょっとした木片でも削れまふからね！　フフン、所詮、敵は練った小麦粉よ……」
「さ、さすが……食べ歩きをするだけある……」
沙龍の周囲に変わった人間が集うのはどうやら宿命のようなものらしかった。

歌舞伎町をうろつくのは情報収集のためもあるが、ユウユウのところに遊びに行くのは単純に楽しかった。
このドクターもまた「魔性の女」であることに間違いはない。経歴は謎だし、年齢も不詳だし、実のところ、本当にオカマなのかどうかもよく分からないのだが。
「こんばんわー、ユウユウ先生」
「あら、沙龍チャン、いらっしゃい。どうしたのぉ～？」
ドクターユウユウの診療時間はだいたい夕方から明け方まで。歌舞伎町の営業時間に合わせている。沙龍は刀削麺の店でもらった乾麺のお土産セットと、シュークリーム持参で夜中に現れた。数日後に迷惑をかける予定なので、その詫びのつもりであるが、そうは言わない。
「まぁ、ありがとう！　めぐみチャーン、沙龍チャンがお菓子持ってきてくれたから！　お茶にしましょう！」
「はい」

真っ白なナース服のめぐみが現れた。
ここは、ふたりとも一目で医療スタッフだと分かる格好をしているし、見た目は普通の病院となにも変わらない。野戦病院のような上田のところとは対照的だ。
が、やはり闇医者だ、と思うのは、受付がないところと、入り口にスプレー式の消火器が置いてあるところだ。入院している仇敵を襲撃に来るチンピラがいたり、運び込まれたヤク中が暴れたりするので、二十四時間気は抜けない。
「そういえば、この前、上田センセが連れてきた急性腸炎の香港ボーイネ、W大の留学生なんだって。歌舞伎町にはご飯食べにきただけみたい」
「へぇ、エリートじゃん」
「でも、抜けてるワ、カレ、忘れ物してったのヨ。どうしましょ。大事なもの入ってるんじゃないかしら」
と、ユウユウはハンガーにかかっている上着を指した。沙龍が上田のところから運んだものだ。
「ポケットに定期入れがあるのよネ。取りに来てくれるといいんだケド。私もめ

ぐみチャンもあんまり外歩けないから。知らないキャンパスとか入るのコワイし」

「……」

歌舞伎町に比べれば、日本の大学など無菌室のように安全で平和だと思うのだが、この二人もまた普通の社会では生きられない者たちなのだろう。

沙龍は思いつきで、自分がその大学まで届けに行く、と請け負った。定期にはしっかり名前もかかれてあった。個人情報を外部に漏らす行為だが、そこらへんはさすがに闇医者なので、ズブズブである。

9　留学生

山手線の高田馬場駅で下車し、早稲田通りを迷わず東方向に歩いた。興信所の職員として日々鍛えられているので、都内の地図はだいたい頭に入っている。

沙龍は既に日本人になりきっている。日本語もマスターしたし、東京どころか、日本中、すぐにどこにでも行ける。中国語を喋らない限り、中国人と間違われることはなかった。

大学の構内を歩くのも堂々としたもので、誰も怪しまない。

学生でもある木佐小次郎に彼の学校を案内してもらったこともあるので、大学というものの雰囲気を知っているのだ。基本的に日本の大学は門戸開放しているので、部外者でも簡単に入れる。

学内の案内図を見て、学生課というところに行くことにした。

「あのー、忘れ物拾ったんですが」

「あ、はいはい。これ？」

対応に出てきたのは三十代くらいの男の事務員で、沙龍の差し出した紙袋の中身を確認していた。
「なんか定期入れも入ってるみたいです。本人、探してるんじゃないかなー」
「あ、そういえば、定期探してる子、居なかった？　ほら、留学生の」
事務員は後ろを振り返って、デスクワークをしている同僚の女性に聞く。「居た居た。李さん」という答えが返ってきた。その同僚が、
「昨日も『定期入れの落し物ないですか？』って聞きに来てましたよ。あの人、理工学部でしたよね？　今日、来てるかな……」
壁に貼った時間割表のようなものを見ながら言っている。
「（理工学部？）あ、じゃあ、私、持っていってみます。本人の顔、知ってるので。もし会えなかったら、またここに来ますので」
「あ、そう？　悪いね。じゃ、お願い」
学部さえ分かればこっちのもんだと思ったが、甘かった。なにせこのマンモス校ときたら、やたら広い。理工学部の学生とやらも何万人単位で居るのかもしれない。

「すいません、李さんを探してるんですけど、あの、留学生の――」
理工学部の校舎の近辺で、何人か学生をつかまえて聞いてみたが、そもそも本人を知っている人が居ない。
「留学生、多いからねぇ……。あ、でも、留学生ネットワークみたいなもんがあるって聞いたから、そこで聞くと早いかもよ？」
何人目かのトライで、茶髪の男子学生がそう教えてくれた。そのネットワークは、別にオフィスなどがあるわけではなく、学食などで留学生同士溜まって、情報交換をしているらしい。
「ありがとう！」
沙龍は近くの学食に寄ってみた。
まだ昼には早い時間だが、チラホラと学生の姿がある。その中に、明らかに日本人とは違う二人組が居た。一人は欧米人で、もう一人は中国人だろう。沙龍には分かる。二人は英語で話していた。
「こんにちは」
沙龍はその二人組に話しかけてみた。

「ハーイ、一緒にお茶する？」
欧米人はノリがよい。
「えっと、私、李さんという留学生を探しているんですが、知ってますか？　彼の落し物を拾ったので」
「李？　理工の？　香港の李？」
中国人のほうが反応した。
「そうそう、そうです、その人！」
「さっき、会ったよ。いま、谷川教授の講義受けてる最中じゃないかな。もうすぐ終わると思うけど、どうする？　ここで待ってる？　李に、終わったら学食来るよう、メールで言ってあげるけど」
ラッキー、と思い、この親切なチャイニーズにお願いした。留学生にも色んなタイプが居る。
それから三十分ほど、欧米人に缶コーヒーをおごってもらって、三人で雑談をしていた。あまり得意ではないが、沙龍も英語が少し喋れるので、彼らの会話は分かる。

自分は日本に来て何年だとか、君は日本人なの？　とか、そういった会話から入って、郷に入ったら郷に従うのは当然だとか、李は日本語がほとんど喋れないのに留学に来たということをチャイニーズがこぼしていた。そのニュアンスには「これだから香港人は」という批判が少々ある。そのことから、彼は本土の内陸生まれだと分かった。英語のアクセントと雰囲気から出身は北京だろうと沙龍は思った。

確かに香港の人は、自分たちは本土の中国人とは別だと思っているふしがあって、英語の喋れる国際人だという自負すらある。

「日本ではどこでも英語が通じると思ったみたいだね。そこがまず認識不足なんだけど」

そんな話をしていると、本人があわててやって来た。

「連絡ありがとう、助かったよ」

と、まずはチャイニーズに英語で礼を言って、李は沙龍を見た。

「覚えてる。君、あそこの病院に居た人だよね？　そっか。病院に忘れたのか」

あのときは痛みで死にかけていたが、やはり沙龍の髪の色は覚えていたらし

い。どうも看護婦と勘違いしているようだが、そこはむしろ好都合である。
「ありがとう。定期も大事なんだけど、これ、家族の写真も入っててね。もう諦めかけてたから、うれしいよ」
李がお礼になにかご馳走するというので、日本人らしく最初は断ったのだが、結局、ついていくことにした。
学生街らしく、若者向けの喫茶店や食堂が多い。李はその中のひとつ、雰囲気のよい珈琲店に沙龍を誘った。しかし、ここでも彼は注文を聞きにきたウェイトレスに英語で通そうとする。見かねた沙龍が日本語で注文しなおした。
「君は通訳も兼ねているの？　広東語も英語も、日本語もできるんだね。すごいな。え、日本人なの？　そっか」
北京語も上海語も喋れます、と言いたかったが、むにゃむにゃと笑顔で誤魔化した。
「もう、お体は大丈夫ですか？」
会話は、彼が一番喋りやすそうな広東語にすることにした。
「ああ、うん。ありがとう。あの後は順調だよ。ドクターの話では、もともと風

邪気味で体調がよくなかったところに、アルコールを飲んだせいだろうって。ストレスも原因のひとつだって」
「ストレス……、多いですか？　やっぱり」
「まだ慣れてなくてね。日本に来て一ヶ月しか経ってない。日本人はたいてい親切なんだけど、距離が遠いよ。日本語が分からない自分が悪いんだけど」
「……」
「で、ホームシックみたいになっちゃって。同じ研究室の日本人が、歌舞伎町では広東語が飛び交ってるよって教えてくれたんで、行ってみたんだ。そしたら、慣れないビール三杯であのザマだよ」
「そうだったんですか。でも、あそこは色々と物騒だから、広東語が聞きたいだけなら、中華街のほうがいいですよ」
「そうだね。ちょっと遠いから、まだ行ってないんだけど」
　濃い珈琲は美味しかった。とても丁寧に淹れられている。貧乏な留学生は利用しない店だろう。李の実家はお金持ちのようだ。そんな彼は知っているだろうか？　歌舞伎町の実情を――。

「歌舞伎町では中国からの留学生や就学生がいっぱい働いてます。その大半が、オーバーステイになってて、でも帰れない人。借金を返さなきゃいけないから」

不法残留、不法就労（※留学生は風俗関連営業の店では働いてはいけない法律がある）だ。

いや、そもそも日本には偽造パスポートで来ているので、留学生である前に不法入国者なのである。そうまでして日本に出稼ぎに来る理由はなんなのか――。もちろん、理由は金以外にないのだが、そこにはあの国の闇が絶えずある。

「僕も、そういう人に何人か会ったよ」

李の表情が曇った。ボンボンの李にも、中国の貧困層の事情は理解できているらしい。

「最初は留学生だったのに、歌舞伎町に染まってしまって、マフィアのボスになった人も居ます」

「もしかして……、徐栄福？」

「知ってるんですか？」

「中国人留学生だけのネットワークがあるからね。別の大学に行っている、香港

出身の子に聞いたよ。その子はもう二年くらい日本に居るんだけど。徐は半分、英雄視されてるって」
「英雄視？」
「従来のマフィアとは一線を画し、派手なブランド物を身につけることもなく、綺麗な女性を何人も愛人にすることもない。徐栄福という男は祖国を発展させることを最終的な目標にしている。彼は既に本国で会社を興し、工場をいくつか建てたようだ。億単位の金を両親の元に送ってもいる。見上げた傑物だ――。香港の子はそう言っていた。彼のことを劉玄徳の再来と言う人まで居るよ」
三国志の英雄、蜀の劉備玄徳――。
（やれやれ、猿山のボスを担ぎ上げてくれるじゃないか……）
沙龍は鼻で笑いそうになるのを我慢して、普通の日本人を演じ続けた。
「そうなんですか。すごいですね」
「もちろん、彼のことを悪く言う人も居るよ。さっき学食で会った宋さんなんかは、そういうの嫌いみたいだね」
留学生も様々である。

さっき、沙龍が言ったような歌舞伎町に居る留学生たちは、日本語学校で日本語を学んでいる程度であり、それも日本に来るための口実でしかない。本当の目的は金稼ぎだ。宋や李のように、一流大学で研鑽を積むために来日しているわけではない。

しかし、いま話題に出ていた徐栄福は後者で、三年前は天下のH大に通っていたそうだ。李が教えてくれた。学籍はもしかしたらまだ残っているのかもしれない、と。

その日は、李の「今度、中華街に一緒に行ってくれませんか？」という誘いを、やはり日本人らしく「ごめんなさい、忙しくて……」と、愛想のいい笑顔で断って、別れた。

できたてホヤホヤのカレシが居るのに、他の男と出かけている暇はない。そもそも腹が痛いと情けない声で叫ぶような男はお断りだ。

ボディガード期間は終わったが、加納には引き続き身辺に気をつけるよう言っ

ている。
しかし、ここ数日、加納の周囲に動きはない。
それもそのはずで、事態は沙龍の思わぬところで進んでおり、先日『ミヤビ』の前で台湾人たちが殺されたのを、福建勢の仕業だと勘違いした林が戦争を始めてしまったのだ。こうなっては、ホストひとりにかまっている場合ではない。
元から両者には因縁があった。火種はなんでもよかったのである。
沙龍が李に定期を届けた日の夜、職安通り寄りの、とある福建人の経営する飲食店が爆破された。が、ここは徐の息がかかっていた店ではない。林にしてみれば、福建人なら誰でもよかったのだ。要するにみせしめである。
オレンジがかった夜空に、黒い煙が立ち上るのを、ヤジ馬にまじってひとりの若い男が見つめていた。
徐栄福その人である。
背丈は一七〇センチ。やや童顔でパーカーにGパンというラフないでたちである。マフィアには見えなかった。一見してどこにでも居る普通の若者だ。
「なにがあったんですか？」

黒煙を見つめる徐に、通りすがりの女性が声をかける。地味なおばさんに変装したジンだ。
「さぁ、なんか爆発したみたいですね」
徐はジンをチラッとだけ見て答えた。
そのイントネーションは、分かる者が聞けば日本人でないと分かるが、この程度の会話ならネイティブの日本語と比べてまったく遜色がない。
「あらぁ、怖いわねぇ……」
ジンはすぐ行ってしまった。悪戯心が沸いて声を掛けただけのようだ。

10　ハーフたちの事情

日本人と中国人の混血というと、多くは残留孤児二世と呼ばれる子供たちを指す時期があった。中国で育った彼らは、日本で暮らしていくために色々な苦労を強いられただろう。うまく日本の社会に溶け込めた者も居るが、そうでない者も居る。

ジンは、そういった残留孤児たちとは事情が異なり、上海から東京に出稼ぎに来ていたホステスと、日本人の経営者の間に生まれた。混血児としては、比較的恵まれた環境で育ったといえる。

父親は中国人の美人ホステスに夢中になり、出会って三ヶ月で結婚。子供も生まれたが、わずか二年で離婚した。このあたりの事情はジンにはよく分からない。父親が美人に飽きたのか、母親が用済みになった父親を捨てたのか。

母は慰謝料を貰いながら子供を育てた。港区のマンションに住み、ジンはブランドものの服を着て小学校に通った。母子家庭で、母親はほとんど働いていない

のにそんな贅沢な暮らしができたのは、毎月の慰謝料のおかげというよりも、別の収入があったからだ。

家の中では広東語、外では日本語を使い、幼いながらに二つの祖国というものを感じながら育ったジンは、物心ついた頃に、母親から驚愕の事実を知らされる。少し変わった母親だとは思っていたが、中国人の母は実は上海の裏社会の出身で、日本国籍の子供を作るために日本に来た、というのだ。

それはひとつの強大な帝国である、という。その帝国の名は、『蒼龍会』――。

母親は、蒼龍会の市場開拓のための尖兵として送り込まれたのだ。彼女の最大の任務は、日本国籍を持つ後継者を作ること。そして、後継者（ジン）の役目は、日本国籍を持つという点を最大限利用して、日本の裏社会の実情を把握すること。当然、直属の上司と「老板」以外に、自分の正体を明かしてはならない、と厳命された。

ジンに、拒否権はなかった。

「静香、貴女はハーフなのだから、日本人として生きてもいいのよ。組織に縛ら

れる必要はないわ。代替わりすれば、また事情も変わってくるでしょうし」
母親はそう言っていたが、自身はそれを信じていない口ぶりだった。
「組織を裏切ったらどうなるの？」
「まぁ、バレたら殺されるわね」
美しい顔が少しも動かずに言う。
まだ三十代前半くらいにしか見えないが、この頃、既に四十半ばにはなっていただろう。恐るべし、チャイニーズ・アンチ・エイジング。
「それじゃ意味ないよ」
小学生のジンは賢い子だった。なるべく目立たないよう、クラスで一番にならないように、そこそこの成績をわざと取れるほどには。だから、自分に拒否権がないことも知っていた。
「それでも、バレるまでは自分の思うように生きられるでしょ？」
「ママは、自分の思うようには生きられなかったの？」
「さあ……？　どうかしら」
母親は誤魔化したわけではない。本当に分からなかったのだ。

美しいことだけを武器に裏社会を生きてきた母親には、そういったことを考える必要も余裕もなかったのかもしれない。

ジンはその後、銃の撃ち方や分解の仕方を覚え、特殊な記憶術や房中術まで学んでいくことになる。

李沙龍が何者かの思惑によって作られた存在なら、ジンもまた同じである。その抗い難い大きな運命に対して、例えば「ケーキ屋さんになりたいから」という理由で歯向かうのはリスクが大きすぎるだろう。

なにかに抗わなければならないとしたら、それは自分の命を脅かす輩に対して、だけでいい。

そのときに、選択肢をたくさん持っていることは、確かに恵まれているのだろう。沙龍やジンのように腕力も知力も得る機会のなかった浜田美枝は、若い性を差し出すしかなかったのだ。

林は、台湾マフィア『天幫』の日本でのまとめ役に過ぎない。台湾には陳という老大が居るが、その陳は林の顔すらまともに覚えてはいない。小太りの林は、一度、陳が来日したときに接待をしたが、ボスに「お前の顔は暑苦しい」と言わ

れ、あまり近寄らせてもらえなかったのだ。
浜田美枝も、林の暑苦しい顔が嫌いだった。情婦になる前から、なってからも、あの顔をまともに見つめたことはない。いつも下向き加減に「はい」とか「そうですね」と返事をするだけだ。

午後二時、石川町の駅から歩いてきたジンは路上にビートルを見つけて近寄った。他にも路駐車が多いので、特にビートルだけが目立つことはない。十メートル先には問題のマンションがある。
自然な動作でビートルに乗り込むと、運転席の宇佐美が言った。
「浜田美枝は部屋からほとんど出てこないね。宅配の対応だけはしてるみたい」
「林の追っ手を警戒しているんでしょう」
「見つかったらただじゃすまないもんなぁ……」
林に内緒でホストと火遊びをしていた上に、組織の金まで持ち逃げしたのだ。抹殺リストに載っているだろう。単独犯か、そそのかしたのが徐栄福だとして

も、大胆すぎる行動だ。本来なら、もっと遠く、海外に逃げていても不思議はないが、近場の横浜に隠れているところが不可解だった。木の葉は森に隠せということだろうか。

「千春君が中華街で彼女を見かけたのはほとんど奇跡でしたね」

ジンがサングラスを外しながら言った。

「ホントだよ。それに、千春君だからできたことだよね。あの粗い写真だけで人の顔を覚えちゃうんだもん」

「日本の警察にはもっとすごい『ミアタリ』という捜査法があると聞きましたが？」

ジンは宇佐美が警察に居たことを知っている。沙龍から聞いたのかもしれないし、それ以前に、沙龍の身辺を調べたときに知ったのかもしれない。

「ああ、『見当たり捜査』ね。うん、確かにアレもすごいよ。僕には真似できない」

「マニュアル化されたノウハウがあるわけじゃないんですか？」

ジンは単純に情報収集のつもりで探っているのだ。もちろん、好奇心もある。

「ないない。あれは根性と気合で覚えるのよ。……まぁ、それでも、コツはあるらしくてね。絶対変わらないのは目だって、言ってた人が居たな」
「目、ですか」
その昔、耳は整形で変えられないから耳を見ろ、というマニュアルがあったが、今は技術が進み、整形でなんとでもなる。しかし、目だけはやはり変えようがない。カラーコンタクトをいれても、目尻や目頭をいじっても、瞳孔の印象というものは変えることができないという。
ジンの経験則からしても、人間の性格や本音は目に出る。どんなに偉そうな態度を取っていても、目が泳いでいれば、その人は怯えている証拠だ。
ジンは今まで沙龍ほどに目の据わった人間に出会ったことはない。この人は、なにも恐れる必要がないのだ、と、一目で分かった。
その李沙龍は、さっき電話でこう言っていた。
「浜田美枝を拉致して無理に証言を取ったとしても、林は信じないだろうし、第一、もうそれどころじゃないはずだ。しかし、加納ちゃんへの謝罪は形だけでもしてもらう」

それが、東新宿探偵社の仕事だ。
そのためには、徐が来ないうちに、浜田美枝に接触して、連れ出すか、マンションの中に入れてもらうしかない。
「やはり、宅配業者に化けるしかないですね……。宇佐美さん、芝居の経験は？」
「ないない。演技すると棒読みになっちゃうタイプ」
宇佐美がダメなら、千春にやってもらうしかないが、あの地味な青年にできるだろうか、とジンは思った。

ジンの心配をよそに、千春は見事な演技力で愛想のいい宅配業者になりすまし、「重いので中まで運びますね」と、玄関の中まで入れてもらった。
白いパーカーに黒のスパッツというルームウェアの浜田美枝は、ずっと不機嫌な顔をしていたが、目は絶えず動いていた。
「あ、すみません、浜田さん」

軽い荷物を重そうに降ろした千春が、ニコニコと笑顔を見せながら言った。
「自分、本当は宅配の人じゃないんですよ」
「え？」
あどけない顔が一瞬、警戒の色を見せる。
「あなたに危害を加える気は一切ないので、ご心配なく。興信所の人間です」
「……興信所？」
浜田美枝は後ずさった。
銃でも取りに行かれるとまずいな、と思ったので、千春もなにかアクションを起こそうとしたのだが、そのとき、背にしていたドアがガチャっと開いて、
「すみません、突然、お伺いして。わたし、加納の姉です」
ジンがぺこぺこと頭を下げながら現れた。
「加納さんの……？」
弱そうな女性が現れたことで安心したのか、浜田美枝は不機嫌な顔に戻って、
「それで、なんのご用件なんです？」と開き直った。
ジンは弱弱しいふりをしていても目は動いていない。ふたりの女性の様相は

まったく逆なのだった。
三十分ほどで帰ると約束して、部屋の中にあげてもらった。
リビングルームには舶来の調度品も置いてあって、ゴージャスな生活が伺える。しかし、掃除はされていないようで、各所に小さなゴミは散らかっているし、全体的に荒んだイメージが拭えない。台所側の大理石のテーブルには不似合いなピザの出前の箱が置いてあった。
革のソファに所在なげに腰をおろしたジンの芝居が始まる。
「実は、わたしの弟が、あなたとの仲をとあるスジの方に脅迫されていまして……。働いていたお店にも何度かそういった方が現れたらしく、弟はお店に迷惑をかけたといって、そこを辞めてしまったんです。小さい頃から優しくて責任感の強い子でしたから、長年お世話になった職場を離れるのは辛かったと思いますわ」
セリフの抑揚が火曜サスペンス劇場のようで、千春はニヤニヤと笑いたくなるのを何度か堪える羽目になった。まったく素晴らしい。自分の営業用人格など目じゃない。この人はいったい何者なんだろう？　馨さんの友達だと言っていたけ

ど、とても只者じゃない気がする――。
その芝居に騙された浜田美枝は段々と横柄になってきた。
「それで、私にどうしろっていうんです？　加納さんとは別に付き合っていたわけではないんですよ。何度か一緒に食事をして泊まったりしただけですから、今更、責任を取れとか言われても困ります。なんなんです？　お金でも欲しいんですか？」
「お金は……要りません。ただ、あなたは恋人が居るのに、弟を誘惑したわけですよね？」
「恋人……？」美枝は吐き捨てた。「あの台湾人のハゲデブのこと？　あんなの恋人でもなんでもないわ。ちょっと借金があって、脅されてたからそばに居ただけよ」
「それでも、そのかたが、あなたと加納さんのことを知ったらなにが起きるのか……。予測できなかったわけじゃないですよね？」
「だからなによ？　お金が要らないなら、なにをしに来たのよ？　あんたたち」
ジンは浜田美枝の目の動きを見逃さない。お金の話をするときにやたら寝室の

ほうに視線を投げるのも。どうやら、ベッドの下には大金があるようだ。
「弟に、謝って欲しいだけです」
「はぁ？」
「弟はあなたに騙されて、とても傷ついています。あなたのこと、どの程度かは分かりませんが、好きだったんだと思います。未練もあるんだろうと思います。ですから、あなたの口から、あれは遊びだった、とハッキリ認めて、謝罪して欲しいんです。そうしないと、弟は前に進めませんから」
浜田美枝は、最後のほうは呆れた顔をしていた。
「そんなことなの……？　なら、詫び状のフォーマットでもなんでも持ってきなさいよ。サインくらいしてあげるわ」
サッと千春の手に紙が現れる。これもまた見事である。ジンはその動きが見えなかった。
Ａ４のコピー用紙には、既に数行の文字が印刷されていた。
「では、内容をご確認いただいて、納得したら本名でサインをお願いします」
千春は「本名で」を強調して言ったが、美枝はそこには気付かずザッと目を通

してから、渡されたボールペンを取った。そのとき。
ジンの口調がガラリと変わって、
「浜田美枝ではなく、徐美怜（シュメイリィエン）でね、お嬢ちゃん」
「……!?」
美怜（メイリィエン）と呼ばれた女性は震えだした。中国語か、日本語か分からぬ言葉で、短い悲鳴をあげる。
「どうして……なにを……!?」
「言ったでしょう。謝ってくれればいいって。早くサインをしてくれる？　わたし達に早く帰って欲しいならね。お兄ちゃん、帰ってきちゃうわよ？」
ジンは、動けない美怜の背後からガシッと右手を掴み、促した。
「ねぇ？　浜田美枝はあなたが殺したの？　それともお兄さんが？　日本のパスポートはとても優秀だって知ってる？　知ってるわよね？　写真を張り替えたくらいじゃ、警察官は騙せても、入管は騙せないと知って、高飛びを諦めたの？」
全部知っているぞ、という脅しである。
徐美怜は可哀想なくらいに怯えて、サインの字は相当曲がってしまった。

ふたりが帰る間際になって、ようやく少し落ち着いた美怜は捨て台詞を吐いた。

『くそったれが……』

『残念ながら、中国語は分かるのよ』

ジンはもう彼女を見ていなかった。見る必要もなかった。

『そう……。あなたも混血なのね。なのに、日本人の味方をして私を追い詰めるの？　私がいったいなにしたって言うのよ。私を黒孩子（ヘイハイヅ）（無国籍の子）にしたのは両親だし、私をこんな風に利用したのは兄なのよ。なのに、なんで私が人の目を気にして、怯えて暮らさなきゃいけないの!?』

『……それは、神様にでも聞いたら？』

ジンのその言葉は苛立ちに近い。

千春は気まずい空気の中、律儀に礼を言って出て行った。

「彼女、なんて言ってたんです？」

ビートルで新宿に戻る間に、千春が聞いた。中国語はさっぱり分からないので、ふたりの女性の厳しい表情が気になったのだ。

「『一人っ子政策』って知ってます？　中国の」

ジンは車窓をぼんやり眺めながら言った。

「ええ、まぁ。子供は一人しか作っちゃダメっていうアレですよね」

「そう。二人目は絶対ダメではないんだけど、とても条件が厳しいんです。罰金みたいなものもあるから、裕福な家庭でもない限り、諦めるしかないんだけど、農村部では働き手も欲しい、でも、ペナルティーも嫌だってことで、二人目ができても届けずに産んでしまうことが多いんです。その場合、子供は無国籍になってしまう。それが『黒孩子（ヘイハイヅ）』。当然、学校も行けないし、まともな就職もできない。社会から『居ないことにされている子』です。彼女、徐美怜も『黒孩子』らしいです。それで、色々と苦労したのでしょう。世の中の全てを呪っている目をしてました。日本人も、中国人も、台湾人も……」

千春には無縁の話だ。自分も孤児なので苦労をしなかったわけではないが、国籍云々の話はよく分からない。

「彼女の母親は貧しい農村の娘で、都市に『出稼ぎ』に来ていたところ、赴任中の日本人の商社マンに半年契約で『買われた』らしいです。夜のお世話もする家政婦ってところでしょう。そこで、望まぬ妊娠をしてしまう。村には夫も子供も居るので、ひそかに堕胎しようとしたが、バカな商社マンが情にほだされたのか、『産んでくれ』と言い出した。金は出すから、と。それで、徐美怜はこの世に生まれた――」

言葉を切って、ジンはしばらく煙草の煙を吸い込んでいた。

運転している宇佐美があとを引き継いだ。

「でも、商社マンはバックれ、日本に帰ってしまい、貧しい農村の家には『黒孩子』が増えたってわけ。その後、家庭がうまくいくはずもなく、父親も失踪。異父兄妹、特に妹は日本という見知らぬ祖国に憧れと憎悪を抱きながら育った――ってことは容易に想像がつくね」

「兄の徐栄福は、国費で留学ができるほどに優秀だったらしいですよ。それで、迷わず留学先に日本を選んだのも、妹のことと無関係ではないでしょうね。いつしか本業を忘れてマフィアになり下がったのも、本人は最初からそのつもりだっ

たのかもしれません。まっとうな方法で成功して故郷に錦を飾るよりは、自分たちの家族にとっての敵の国、日本で荒稼ぎして、復讐したほうが効率がいいと思ったのだとしたら……」

「悲しい話ですね」

千春が呟く頃には、首都高から新宿の街並みが見えてきた。

不夜城にそろそろ灯がともる。

11　会見

最初、徐栄福が福建の竜門会グループに近付いたのは、母と妹を日本に呼び寄せるのに彼らの力が必要だったからだ。無国籍の妹は、パスポートは当然持てない。また、例え、正規のパスポートが取得できたとしても、就労ビザや就学ビザはほとんど降りないのが中国という国だ。観光ビザならそれほど苦労はしないが、それでは意味がない。

そのために、中国人たちは竜門会を利用し、タイやマレーシアの偽造パスポートを用意してもらって、日本に入るのだ。少しでも長く日本でお金を稼ぐために。

徐美怜も、最初はタイの偽造パスポートで入国した。彼女が十二歳のときだ。

そのときの代金は母親の分と合わせて四百万円。急いで稼ぐ必要があったが、既に学内で賭け麻雀の胴元をやっていた徐にはそれほど大きな金額ではなかった。もともと、彼には金儲けの才があったのだろう。

そのうち、同郷ということで付き合いのあった福建人から、歌舞伎町の事情を知ることになった。日本のヤクザは新しくできた法律のせいであまり目立つことはできない。いまがのし上がるチャンスだ、と。竜門会の日本でのボスとも面識ができた。狡猾で、小心な男だった。いつかそっくりそのままこいつの地位をかっさらってやる。そう誓った。

それから、徐栄福の誓いが実現するのはわずか一年後。そこからは徐栄福の天下だった。他の外国勢力の様子を見ながらうまく立ち回り、信じられない額のお金を稼いだ。本土の老大からは何度か人を介して指令と忠告のようなものがあったが、全て無視した。この先、不法入国ビジネスだけではやっていけない。自分は自分の好きにやる――。

しかし、従来のマフィアの伝統や様式を嫌い、合理的に事を進めようとする徐についていけない手勢も居る。彼らは本土に帰ったり、一匹狼になったり、また、はぐれ者同士で徒党を組んだりした。

偽造パスポートが手に入らなくなった件について、徐は大して気にしていなかった。自分なら、違法に金を稼ぐ手段はいくらでも作れる。そう驕った。

台湾マフィアの林は、最初から傍若無人な徐が気に入らず、何度か会席をして、縄張りの確認をしたが、決裂。台湾人と福建人は歌舞伎町ですれ違えば小競り合いを繰り返すほど険悪になっていった。

台湾クラブで働いていた日本人の女性が「お金がなくてパパを探している」という触れ込みで林に近付いたのは今年に入ってからのことだった。頭の悪そうなところが気に入って愛人にした。普通、日本人は日本人の経営する店で働く。なぜ彼女が台湾人の店で働いていたかというと、日本のヤクザに追われていて、日本人の「ケツもち」の居るところでは働けない、というのだ。なんでもヤクザの内部事情（主に麻薬の取引に関する）を知ってしまったということで、それも林には魅力的な話に思えたのだろう。

実際には、徐栄福が独自のルートで得た情報を少し加工して流していただけの話だが、ところどころ合致していれば、あとは頭の弱い女のことなので、齟齬があっても勘違いや記憶違いで済まされる。

そうして、徐兄妹の計画は着々と進められていった。目下の目的は勢いのある台湾勢を潰し、歌舞伎町の覇権を握ること。

加納というホストをターゲットにしたのは、いまだに日本人の経営する店が繁盛しているのが目障りだっただけだ。加納にハニートラップを仕掛けて台湾人たちを怒らせ、日本のヤクザと潰し合いをしてもらうつもりだったのだが、これはなぜか失敗した。

部下に聞いても、なにがどうなったのかよく分からない、という。どこの勢力も動いた気配はないのに店は無事で、台湾人の戦闘員が数人死んだというのだ。誰が殺ったのかも分からない、と狐につままれたような顔で報告してきた。

「もしかしたら……、人の仕業ではないんじゃないですかね？」

「お前……、寝ぼけてんのか？　もうすぐ二十一世紀になろうっていうのに。歌舞伎町の路地裏ではキョンシーが暗躍してるのか？　馬鹿馬鹿しい！」

徐は呆れて部下の後頭部を叩いた。

「そうは言っても、大哥。真面目に修行している道士には、三尸（さんし）（中国の妖怪の一種）も仙狸（せんり）（化け猫の一種）も見えるって話ですよ？」

その後、しばらくしてあの爆破騒ぎがあり、事態は一気にヒートアップした。いつまたどこの店が爆破されるか分からない。自分の配下にはできる限り武装

を強化するよう言い渡し、林は発見次第殺せ、と命令を下した。
しかし、林の所在は分からない。寝床を決して明かさないのもチャイニーズ・マフィアの特徴だ。日本のヤクザのように代紋を掲げた事務所を構えたりはしないのである。
徐にできるのは、情報が入るのを待つだけだった。
格好の情報が入ったのは今日の昼頃。林が、どこかのお偉いさんと会見の席を設けるらしい、というのだ。本土の老大が来るのか、と思ったが、その気配はない。なら、日本のヤクザの組長と一時的に共闘でもするつもりか――。
いずれにせよ、徐にはチャンスだった。

風林会館のフロアーを借り切って臨んだのは極秘の会合のはずだった。が、情報はどこからか漏れる。単純な話だ。金が動けば風の流れも変わる。より多くの金をうまく使う者が勝つのがこの世界である。
まして、この会合をセッティングした者がわざとその情報を流したのだから、

それは瞬く間に狭い歌舞伎町の間を一陣の風のごとく吹き抜けていった。今夜、なにかがあるぞ、とコロンビアマフィアも、闇に潜んでいる北京勢も香港勢も気付いていた。

ネオンの光の渦の中に潜む魑魅魍魎も、固唾を呑んで事の成り行きを見守っている。

「猿山の大将、来るかな？」

沙龍は、横浜から戻ってきたジンと合流し、いつものラフな格好で風林会館に向かっている。Tシャツにスパッツという、一番動きやすい服装である。隣のジンが秘書然としたスーツ姿なので、ふたりの関係はパッと見にはよく分からない。家出少女と保護監察官に見えなくもなかった。

「来るでしょう。自尊心の強い男ですから」

どっしりとしたレンガ色の建物が見えてきた。

歌舞伎町の北東に位置する風林会館は、日本風に言えば、「鬼門」である。松木ゴローに聞いた話では、鬼門は鬼の出入りするところであり、本来なら、なんとしても避けるべき場所なのだが、地獄へ通じているなら丁度いい、と沙龍がこ

こに決めたのだ。
受付で「東新宿探偵社の者です」とにこやかに名乗ると、緊張した面持ちのボーイが「六階へどうぞ」と言った。
エレベーターの中でジンは素早く三丁の銃の弾倉を確認して、体中の色んな場所に仕舞い込んでいた。エレベーターが止まり、沙龍は一度だけジンを見た。忠臣が頷く。
広間の両開きのドアの前に立ち、日本式にノックをしてから開けた。
「東新宿探偵社の者です。こんばんは。林さんですか？」
「……そうだ」
だだっ広い部屋に林はひとりで突っ立っていた。
それもそのはず、彼の部下たちは今夜はみな病院でお腹を抱えて唸っているはずだ。
昨夜、林の弟の結婚式があって、日本に居る『天幇（ティエンパン）』の面子はほとんどその場に揃っていたのだ。そこで出された食事に誰かが何かを仕掛けたのは明白である。ただ、林は目の前の少女の仕業とは夢にも思っていない。さらに言うな

ら、本音は別にして、ボディガードなしでは動けない、などという泣き言は死んでも言うつもりはなかった。
林は丸っこい体に、濃い色のスーツを着ていた。確かに、まるで似合っていない。加納が言ったとおりだ。
「約束の時間の三分前ですが、ご年配の方を先に到着させて申し訳ありませんでした。このたびはわざわざ出向いて下さって感謝いたします」
驚くことに、これは沙龍が言っているのだ。しかも、棒読みでもなく、まるで手馴れた営業職のスタッフのように。
しかし、林は少々苛立っている。食中毒で全滅した部下のこともそうだが、こんな小娘に慇懃無礼に出られては、どう対処してよいか分からない。相手は堅気の日本人である。なにか怪しいところがあれば撃ち殺すつもりだが、小太りの林はあまり俊敏には動けない上に、最近は銃など撃った記憶もない。
「事前にお伝えした通り、加納さんと浜田美枝さんの件です。林さんが誤解なさっているようなので、証拠を示して事実をお伝えするために来たのです」
林にすすめられて、沙龍はやっとソファに腰をおろした。

「……誤解？　わたしは誤解などしていない。美枝は、あのホストに騙されて弄ばれ、わたしに顔向けできない、と失踪したのだ」
それが、林の面子をぎりぎり保つ言い訳なのだろう。実際には、金を持ち逃げされた怒りもあるだろうが、表向きはそれを認めてはならない。
沙龍は立ったままのジンに向けて無言で手を差し出す。ジンはビジネスバッグから一枚の書類を取り出して、沙龍に渡した。
「浜田美枝さん――、本名は徐美怜さんといいます。彼女が加納さんに誘惑されたわけではなく、事実はまったくの逆で、遊びのつもりだった、と認めてサインをいただいてきました」
「なんだって……!?」
林は目の前に置かれた紙をむしるようにして掴むと、目を剥いてそれを読んだ。
日中の両方の文章が印刷されてある。そして、最後には「徐美怜」というやや乱れた手書きの文字。
さらに、絶妙のタイミングでもう一枚の紙が差し出される。

そこには、本物の浜田美枝の免許書のコピーと、徐美怜の写真が貼られた浜田美枝名義のパスポートのコピーがあった。
「徐……、徐栄福の関係者なのか？　妻か？」
「いえ、妹さんだそうです」
「妹――」
放心したような林は、やがて全てを覚り、怒りに震えた。
が、そこでみっともなく怒鳴り散らすことはない。
「胡散臭い興信所だとは聞いていたが、真相をつきとめてくれたことは感謝しよう。正直、美枝がこれを強制的に書かされたのかもしれない、という懸念はあるが、君たちも興信所を名乗る以上、不正はするまい。加納というホストに対しては、今後、手は出さないと約束しよう」
「ありがとうございます」
沙龍がにっこりと笑う。依頼仕事がひとまず終わった、という笑顔だ。
「君は……、美枝、いや徐の妹とそう変わらない年に見えるが、本当に興信所の職員なのかね？　アルバイトか？」

「正規の職員ですよ」
あくまでも日本人らしく、受け答えする。
「わたしが、怖くないのかね」
「仕事なので」
と、答えておいた。雨が降ろうが、槍が降ろうが、電車が止まろうが定刻に出勤する日本の仕事人間というものは、外国人にはとても奇異に映るらしい。
「日本人の勤勉さというやつか……」
そのとき、キン、と空気が張り詰め、なにかが来る、と沙龍には分かった。
ロケット・ランチャーを撃ち込まれないように最上階を借り切ったのだが、徐栄福が最新式のＲＰＧを持っているならそれも意味がない。
幸い、フロアーが丸ごとなくなる、などという事態にはならなかったが、投げ込まれた手榴弾は部屋の中のものをだいぶ破壊した。沙龍が座っていたソファも、壁際に置かれていた壺も、鉢植えの木も。
しかし、部屋になだれ込んできた若者が、マシンガンを撃つ前に勝敗は決していた。ジンが自分のベレッタで若者の両肩を撃ち抜いていたからだ。

「……なんだ、なにが起こった」
沙龍に引き倒される形で床に伏せていた林は、やっと起き上がると、ジンが牽制している男の前までよろよろとやって来た。
徐栄福本人である。血を流しながら、虚ろな目で林を見つめていた。
「若造が……」
こんな状況で、自分は傷ひとつなく立っていても勝った気はしなかった。
この数年、歌舞伎町で一番儲けていたのは間違いなくこの男だし、自分に屈辱的な思いをさせたのも、この男だ。
なのに、いま、林は不思議な気分になっている。自分はもしかしたら、この若造に負けたかったのか……？
「あ、春ちゃん？」
沙龍は携帯電話で話していた。
「徐の部下、三人はエレベーターに閉じ込めてあります。もう二人は階段をのぼってきたので阻止しようとしたんですが、一人は突破されました。……大丈夫でした？　すごい音しましたけど」

千春は呑気にそんなことを言っている。が、基本的には沙龍を信じているからこその言葉だろう。
「うん、ちょっと死にかけたけど、大丈夫」
たった五人で乗り込んできたということは、林がボディガードなしだと知っていたのだろう。
「どうしますか、この男」
徐に銃を向けたまま動かないジンが沙龍に聞く。しかし、答えたのは林だった。
「そいつはわたしを殺しに来たのだろう。こちらに任せてくれないか」
「……」
ジンは動かない。沙龍の返答を待っている。
そのうち千春もやって来た。
沙龍は「うーん」と唸ってから、
「林さんに渡しても、その懐のトカレフでトドメ刺すだけでしょ？　でも、順番で言えば、福建の老大が出した『徐栄福抹殺命令』のほうが先だから、部外者が

勝手に殺したら老大は怒るんじゃないかなー？」
「……？」
さっきの丁寧な興信所の職員が、急に友達のような口調になったのが、林には不可解だった。二重人格なのだろうか。しかも、言っている内容が妙だ。
「じゃあ、どうしろ、と？」
「聞いてみる？」
「は？　誰に？」
「だから、老大に」
「……」
林の目の前で沙龍は携帯電話を取り出し、上海に国際電話をかけた。
『あ、張大哥？　久しぶりー。うん、元気元気。あのさ、竜門会の老大、携帯持ってるかな？　番号知ってる？　え？　病院？　あー、療養所みたいな？　直通電話ある？　え？　分かんないの？　もー、すぐ調べてよ。……うん。待ってる』
そんなやり取りをして、三分後には沙龍は竜門会の老大と直接電話で話すこと

になった。
会話自体はとても短かった。しかし、向こうはすぐ沙龍の正体と意図を理解したようだ。事前に、張がなにか言っていたのかもしれない。老大からは適切な回答ももらった。
『……』
林は呆けている。その顔へ、
『好きにしていいって』
と言ってやった。
徐栄福には一瞥をくれただけで、独り言のように言っただけである。
『年上を敬わないからこういうことになるんだよ。まぁ、後の祭りだけどね』
『うわー、いちばん年上を敬いそうにない沙龍様がよく言いますね』
ジンがしれっと毒を吐く。
千春はみんなが中国語で会話しているのでチンプンカンプンである。瀕死の徐栄福が急に暴れだしたりしないように注意はしていた。
『沙龍……、李沙龍か……！』

林はその名に聞き覚えがある。決して関わってはいけないと、台湾の陳老大は言っていた。

『あんた……、どこのお姫様だ。この前から俺の邪魔をしていたのはあんたなのか……』

徐がかすれた声で問うも、沙龍は相手にしなかった。

その価値がない、と判断したのだろう。

徐栄福は、闇社会においてはやはり新参者である。しかも、彼の市場は日本の狭いエリアに限られていた。中国本土の事情など知る由もない。だから、蒼龍会は知っていても『蒼血の沙龍』などという言葉は聞いたことすらなかった。

その後、徐栄福がどうなったのかは知らない。

沙龍は林に任せてその場を引き上げたし、林も徐には恨みつらみがあったのだから、怒りのままに撃ち殺したと考えるのが自然だ。また、林が気まぐれで放置したとしても、出血多量で死んだだろう。

もし徐栄福が存命だとしたら、林が積極的に助けたということである。それは有り得ないだろう。

が、ここに奇妙な話がひとつある。歌舞伎町から姿を消した徐栄福は、その後、故郷に戻って慈善事業に汗を流したというのだ。同名の別人かもしれないし、誰かが成りすましているのかもしれないが、いずれにせよ、東新宿探偵社には関係のない話である。

12　縁

風林会館での一幕の後、腹が減ったと訴えたら、インド料理のうまい店を知っているというので、ジンに連れていってもらうことにした。千春は遠慮したのか、女ふたりに囲まれるのが嫌だったのか、事務所に戻ってしまった。

「ジンはホント、感心するほど色んな店を知ってるね」

歌舞伎町の喧騒の中を歩きながら、何事もなかったように沙龍が言う。

「だって、もう、食べることくらいしか人生の愉しみってないじゃないですか」

「まぁ、それは分かる」

「いや、分かるのもどうかと思いますが……。沙龍様の年齢で」

「そうかなー？　価値観なんて、生まれてから死ぬまでそんなに変わらないんじゃないの？」

「さあ、どうでしょうね」

通りの両側から客引きの声がいくつも掛かった。女ふたりなので、飲食店やカ

ラオケがほとんどだが、中には「お姉さんたち、レズカップル？　ラブホの割引券あるよ？」という声もあった。
「どう見たらそう見えるんだ」
沙龍は笑っていた。
「この風景にも慣れちゃったけどさ、夜中までこんなに明るい街って、新宿以外にもあるのかな。上海も繁華街は明るかったけど、ここまでじゃなかったよ。……あ、ジンは東京生まれ、東京育ちなんだっけ」
「ええ。そうです」
「なんでこんな魑魅魍魎の巣に、みんな、蛾みたいに引き寄せられちゃうんだろうね」
沙龍の他意のない呟きに、ジンは少し真面目に答えた。
「結局、日本がアジアの中で一番豊かだからだと思いますよ。綺麗な水のあるところに、動物は自然と集まるんでしょう……。知り合いの中国人のホステスが言ってました。日本人はみんな金持ちで飢える心配もなく体を売る必要もないのに、なんで日本人ホステスが居るんだって。自分たちの仕事がなくなるからやめ

て欲しいって。日本人だって、全員が恵まれているわけじゃないってことを知らないんでしょうね」

「うん。この国だって、自動的に豊かになったわけじゃないのにね。戦後、日本人はみんな死ぬ思いで綺麗な水にしたはずなのに、今はわーっとやって来た外国人に搾取されて、気の毒といえば、気の毒だよなぁ」

沙龍の言はどこか人事であるが、それは彼女自身が国籍や民族といったものにアイデンティティーを求めていないからだろう。自分は何人なのだろうと考えたりしないのだ。

それはジンも同じである。日本人でもあるし中国人でもある彼女は、本来ならそういったことを思い悩む思春期に、爆弾の作り方も覚えなければならなかったし、人の急所も知らなければならなかった。あれこれ余計なことを考える余裕はなかったのである。

「そうですね……。あ、沙龍様、ご自分のパスポート、ちゃんと管理してます？」

出し抜けにジンがそんなことを聞いた。

「え？　パスポート？　うん、家にあるよ」
「ちゃんと金庫にでも仕舞って大切にしてくださいね」
「でも、あれ、偽造なんでしょ？」
　上海を出るときにスタッフに渡されたものだ。本名の甲斐馨名義だが、精巧な偽造パスポートだと聞かされた。
「そうなんですけど、日本の偽造パスポートはものすごく高いって知ってました？」
「い、いや？　知らない。幾らなの？」
「本物と見分けがつかないくらい精巧なものは、一冊二千万円はします。ちなみに、タイやマレーシアの偽造パスポートは一冊百万から二百万円程度です。その金額の違いで、価値がお分かり頂けるかと」
「そ、そうだね」
「なんでそんな法外な金額になるかっていうと、日本のパスポートにそれだけの価値があって、偽造が極めて難しいからです」
　二〇〇〇年現在、日本のパスポートを個人や組織が一から作るのは至難の業だ

といわれている。使われている紙の素材から製法まで、極秘中の極秘なので、どんなにその道に長けた専門家でも再現はできないというのだ。

しかし、結局、偽札の歴史と同じく、これもイタチごっこで、官と（違法な）民との戦いが繰り返されているのだ。

そして、現在、日本には完璧な偽造パスポートを作れる専門家集団が一チームだけある。もちろん、その存在は公にはなっていないし、地下のネットワークでひそやかに語り継がれているだけなのだが、職人にありがちなことで、彼らは金のためには仕事をしない。「不可能に挑戦するのが面白いからやる」のだそうだ。

このチームの存在は国内よりはむしろ国外での伝説になっており、蒼龍会の幹部である董天はだいぶ前から彼らの存在を知っていた。伊達に長年、地下を徘徊しているわけではない。

彼らは数年のスパンで数えるほどしか偽造パスポートを作らないし、一度、現行のものを完璧に再現できれば、もう情熱は失せる。そこを、なんとか頼み込んで作ってもらったのが、沙龍の、甲斐馨名義のパスポートなのだ。

「へぇ……。それはそれで興味深い話だけど、なんで今になってそんな話を？」
「とても不思議な縁なんですが、貴女のパスポート、たぶん、椎名さんが作ったものですよ」
「えっ!?」
沙龍は、ジンが椎名のことを既に知っていて調べ上げていること、そして、彼が偽造パスポート作りに関わっていることを知って、二重に驚いた。
「まぁ、正確には彼が全部作ったわけじゃないんですけど……。分業制ですから。でも、印字された文字なんかは全部、椎名さんが版下を組んだはずです。当然、氏名の部分も。ですから、彼は最初から『甲斐馨』が自分の作った偽造パスポートで来日したということは承知しているはずですよ」
「……」
半分口を開けたまま、沙龍はいろいろと思い返していた。初めて椎名に会った日のこと、再会したときのこと――。が、思い返してみても、彼はそんな片鱗はちらっとも見せていなかった。
「あまり野暮は言いませんが、一応、そのあたりは注意してくださいね」

「うん……。でも、シーナさんと会ったのは偶然だと思う……」
「ええ、わたしもそう思います。ですから、縁でしょう」
不思議な縁もあるもんだ、と沙龍は思った。
そうだ、椎名にメールを送っておこう。
『パンダの役目、そろそろ交代します』

後日、加納がまた菓子折り持参で事務所に現れ、六本木の店に移ることを告げにきた。
玄関先で、沙龍は思い切って言ってみた。
「加納ちゃん、ホスト続けるの？」
「これしかできませんから」
「そんなことないと思うけど……。失礼を承知で言わせてもらうと、ホストは向いてないと思うよ」
加納はそれを聞いて苦笑した。

「これでも店のナンバーワンなんですが」
「うん、そうなんだけど……。この前、炊事場から眺めてて思ったんだけど、確かに加納ちゃんの仕事ぶりってすごいんだよね。ほぼ完璧。なんか一流ホテルみたい。でも、私はホストクラブに行くなら、加納ちゃんじゃなくて、リョウちゃんに接客して欲しい、って思ったんだ」
「……」
「リョウちゃんはさ、心底楽しそうに仕事してるんだよね。リョウちゃんのテーブルでは、女の人も、すごいリラックスしてバカ笑いとかしてる。大口あけちゃって。でも、加納ちゃんのテーブルじゃ、そういうの、ないじゃん？　たぶん、その違いだと思う。まぁ、好みの問題って言ったらそれまでなんだけど。リョウちゃんはあんなにいい加減で、成績だって低迷してるらしいのに、店をクビにならないのは、店長さんも分かってるからじゃないのかな。リョウちゃんの仕事を愛してるところとか。女の人を楽しませるのが好きで、そういう自分が大好き、なところとか」
「俺は……、楽しそうじゃないですか？」

「仕事中はね。真剣だけど、なんか辛そう」
「……」
加納は「ハァ」と一回息を吐いてから、なぜか笑顔を見せると、
「たぶん、甲斐さんと同じこと、店長にも言われましたよ。結構、みんな、見てくれてるんだな……」
独り言のように言って、一礼してから去っていった。

木佐がイタリアから帰ってきたのは六月になってからだった。まるまる三週間も向こうに居たことになる。少々ヨーロッパかぶれになっていて閉口したが、外食にも飽きてきた頃だったので、多少の意味不明な言動は目をつぶるしかない。
一連のチャイニーズ・マフィアたちとのいざこざを報告したら、
「Uff……、なんでまた、そんな善意の人助けみたいな依頼を受けたんだ？」
自分で「依頼は全て受けろ」と言ったのもすっかり忘れている。
沙龍は笑って言ってやった。

「気まぐれかな」

【終わり】

あとがき

この話は、沙龍と木佐が新宿に住むようになってから、ずっと形にならないまでも私の中には大筋があって、早く文字にしなければ（感覚を忘れちゃう）、と焦り続けたまま、気付けばン十年が経っていました……。完成までにえらい時間を要しましたが、実際に書いた期間は二週間くらいでした。

ジンは最初は男性だったり、加納ちゃんはもっと嫌な人間だったり、いろいろ書くうちに変わってしまいましたが、なんとか（強引に）まとめることができてホッ。毎回、書き始めた物語がちゃんと終わったときは「終わった、万歳」よりも、安堵の思いのほうが強いです。（これを個人的には「終わらないかもしれない病」と呼んでいる）

蛇足ながら「カプリッチョ」はイタリア語で「気まぐれ」という意味。木佐視点で言えば「新宿カプリッチョ」は沙龍のことですが、本当は加納ちゃんを助けたのは気まぐれではなく（※でも正義でもない）、なんとも言いようのないもの

なので、照れ隠しで「気まぐれ」と言うしかなかった、というところが伝われば嬉しいです。

では「なんとも言いようのないもの」とはなんなのか、というと、おそらく、上海の殺伐とした生活からようやく人間らしくなれた、日本に来て徐々に変わっていった沙龍の心情そのものだと私は理解しています。

二〇一七年七夕　小龍